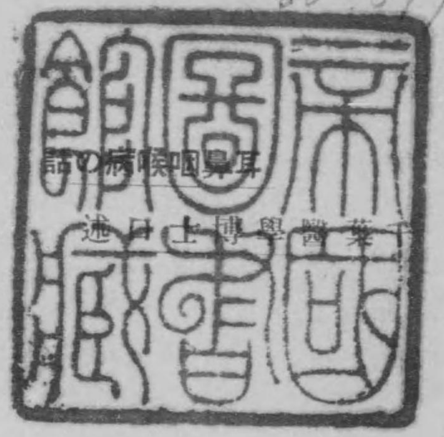
始

130. 9. 19

60-511



話の構成国異耳
通日上博學士著

大正
4. 9. 11
内交

編纂の辭

昔は病氣の數を四百四病と云つたものであるが、世が文明に進み、生活が複雜になるに從つて病氣の數も亦殖えて來るのは各國皆然りで、實に今日では何千と云ふ程病氣の數は多くなつたのである。從つて我々の病氣に侵さるゝ機會も昔の人よりは遙かに多くなつたと云はねばならぬ。

我々の身體には何が大切と云ふても健康程大切なものは無く、また身體の健康なる程幸福なものは無い、從つて吾人は平素力めて攝生其他に注意して健康を保持せねばならぬ。けれども不幸にして一旦病氣に罹つた時には、速かに醫師の治療を求むべきは勿論である。併しながら或場合に於ては病初に於て家庭にて施す些少の手當は、時を經て後行ふ名醫の施

術よりも遙に其豫後を佳良ならしむる場合もあり、又醫療を受くるにしても、其病の性質を知り居ると云ふことは何かに就て大切のことであり、また病の性質を知つて居れば或はこれを未然に防ぐことも出來得るものである。卽ち一般家庭に醫學、衞生上の知識の普及と云ふことは、吾人の保健上最も緊切のことであつて、また文明國民の義務なのである。吾人が家庭醫學叢書を發行する所以も亦實に此醫學衞生思想の普及に存するのであつて、卽ちこれによつて事無きには疾病豫防上の指南車となり、病者に向つては最善の相談相手たらんことを期するのである、

大正乙卯歲新春

編纂者謹誌

凡例

一、耳鼻咽喉科の領域に於ける器質的疾患の爲めに腦の官能に障害を來して、其爲めに神經衰弱となり、また兒童に於ては、此爲めに學業の成蹟惡しく、甚しきは低能兒として處置せられたるものも、一朝其病氣を治療して全治に至り、低能兒視せられたる兒童も頓に其の級中秀才の疊を擦するに至れり等の報告は屢吾人の耳にするところであるが、要するに此等は耳鼻咽喉科の進歩の一證左とするに足るのである。

一、耳鼻咽喉科の疾病中耳疾、慢性鼻炎、咽頭扁桃腺肥大等の病氣は殊に學齡兒童に多く、所謂ガイ氏の注意不能に惱む者が極めて多いのである。

一、また俗に云ふ耳だれは我國の兒童に頗る多きも、然も兩親は當然のことゝして放置するものが多いが、何ぞ知らん之れが爲めに中には腦膜炎を起して死

に至るものもある故耳だれは決して輕視すべき疾患では無い。

一、それから日本の兒童には非常に鼻たらしの多いのが目につくことは洋行歸りの人々の話であるが、此鼻たらしも亦一種の鼻病である。

一、耳だれや鼻たらし、または注意不能症の兒童の多きは、要するに專門醫學の方は進歩せるも、一般人には此等智識の甚だ乏しきに因るものであつて、此知識の普及は最も緊要のものと思はるゝのである。

一、本書は卽ち此要求によつて生じたるものであつて、始め千葉博士に請うて數回の講演を得て之を編し、後更に博士の嚴密なる校訂を經たるものである、幸ひに本書によつて前述の目的を多少なりとも滿たすを得ば編者が望外の幸福とする處である。

大正乙卯孟夏

編纂者謹識

家庭醫學叢書 第三編

耳鼻咽喉病の話

目次

上編　耳衞生と耳疾患

第一章　耳の構造と其官能……一

外耳＝中耳＝內耳＝

第二章　聽器の衞生……三

病氣の注意＝寒氣の注意＝異物の注意＝耳垢の注意＝高音の注意＝打撲の注意＝聾啞の注意＝初生兒に對する注意＝學齡兒童に對する注意＝聽力障害と教育との關係＝游泳の注意＝

第三章　耳翼の疾患……一三

第一　耳翼の凍傷……一三

原因‖症候‖手當法‖
第二　耳翼の外傷……一五
症候‖處置‖
第三　耳翼の畸形……一五
第四　耳翼の濕疹……一六
種類‖小兒の濕疹‖原因‖治療上の注意‖大人の濕疹‖治療上の注意‖
第四章　外聽道の疾患……一八
第一　耳垢蓄積……一八
耵聹の分泌‖症候‖療法‖
第二　外聽道内の異物……二一
異物摘出の危險‖異物の種類‖異物の入つた場合の手當‖無生物の入つた場合‖
第三　外聽道炎……二三
原因‖症候‖鑑別‖應急處置‖
第五章　鼓膜の損傷……二四
間接損傷‖處置‖直接損傷‖處置‖鼓膜の穿孔‖
第六章　中耳の疾患……二七
第一　歐氏管の狹窄及び閉塞……二七
原因‖症候‖原因療法‖聽力檢査の注意‖簡便なる聽力試驗法‖送氣療法‖老人の注意‖
第二　中耳炎……三二
種類‖原因‖豫防法‖症候‖應急處置‖治療上の注意‖慢性症の原因‖耳漏の危險‖症候‖根治手術‖內耳炎‖
第三　急性乳嘴突起炎……三七

中編　鼻衛生と鼻疾患

第七章　鼻の構造と其官能……三九

第一　鼻の解剖……三九

鼻腔‖甲介‖副鼻腔‖前庭‖

第二　鼻の生理的機能……四〇

嗅官‖呼吸道‖言語の關係‖

第三　鼻の衛生……四四

鼻毛を剃るな‖創傷の注意‖哺乳兒に對する注意‖鼻汁過多の注意‖異物の注意‖鼻腔洗滌の注意‖藥液吹入の注意‖藥液塗布の注意‖鼻の手術に就て‖嗅覺の練習‖

第八章　鼻前庭の疾患……四九

第一　濕疹……四九

症狀‖原因‖療法‖治療上の注意‖

第二　前庭の腫物……五一

症候‖原因‖應急處置‖

第九章　鼻腔内の疾患……五三

第一　急性鼻加答兒（鼻感冒）……五三

原因‖症候‖感冒は萬病の基‖哺乳兒の鼻感冒‖鼻つまりの注意‖

第二　慢性鼻炎……五七

種類‖慢性單純性鼻炎‖原因‖治療上の注意‖肥厚性鼻炎‖症候‖原因‖自覺症狀‖注意‖手術に就て藥液塗布の注意‖噴霧器使用の注意‖慢性萎縮性鼻炎の種類‖症候‖臭鼻症‖年齢の關係‖療法‖

第三　鼻腔内の異物……六九
第四　衂血……七〇
原因‖衂血の危險‖症候‖應急處置‖
第五　鼻茸……七三
症候‖療法‖
第六　鼻腔内惡性腫瘍……七四
第七　鼻の黴毒
症候‖隆鼻術‖隆鼻術の進歩‖隆鼻術に對する世人の誤解‖
第八　鼻腔内結核……八〇
第十章　副鼻腔の疾患……八一
第一　急性上顎竇炎……八一
原因‖症候‖療法‖
第二　慢性上顎竇炎……八二

原因‖症候‖療法‖
第三　急性並に慢性前額竇炎……八三
原因‖症候‖療法
第十一章　鼻咽腔の疾患……八六
第一　鼻咽腔加答兒……八六
急性症‖慢性症‖
第二　鼻咽腔腺様增殖症……八七
少年に多い‖症候‖療法‖
第三　鼻咽腔の腫瘍……九〇
第四　鼻咽腔の黴毒……九一

下編　咽頭及び喉頭の衞生と其疾患

第十二章　咽頭及び喉頭の解剖的關係……九二

第十三章　咽頭及び喉頭の生理的機能……九三
第十四章　衛生上の注意……九四
第十五章　咽頭の疾患……九五
第一　急性咽頭加答兒……九五
原因‖症候‖處置‖
第二　慢性咽頭加答兒……九七
原因‖症候‖療法‖
第三　急性扁桃腺炎……九八
原因‖症候‖處置‖注意‖常習扁桃腺炎‖
第四　扁桃腺肥大症……一〇〇
原因‖症候‖注意‖療法‖
第五扁桃腺周圍膿瘍……一〇二

第六　咽頭後壁膿瘍……一〇三
原因‖症候‖療法‖
第七　咽頭實扶垤里亞……一〇四
原因‖症候‖療法‖
第八　咽頭結核……一〇六
第九　咽頭黴毒……一〇七
第十　咽頭の異物……一〇七
第十一　食道の異物……一〇八
第十六章　喉頭の疾患……一〇九
第一　急性喉頭加答兒……一〇九
原因‖症候‖處置‖
第二　慢性喉頭加答兒……一一〇

第三　喉頭實扶垤里亞……二二
第四　喉頭結核……二三
第五　氣管內の異物……二三
附錄　耳鼻咽喉科專門醫に來診を請ひたる時の注意……二四

家庭醫學叢書第三編

耳鼻咽喉病の話

目次終

醫學博士　千葉眞一口述
伊藤尙賢編纂

上編

第一章　耳衛生と耳疾患

耳の構造と其官能

外耳

我々の聽器卽ち耳は解剖學上外耳、中耳、內耳の三つの部分に分れて居る。外耳とは俗に耳と云うて居る處の耳翼と、漏斗狀に奥の方に行く管、卽ち外聽道の事を云ふ。外聽道の奥の突き當りの處には、鼓膜と云うて極く薄い彈力性の膜がある。鼓膜は外耳と中耳との境界をして居る。鼓膜より奥に進むと其處には骨で

圍まれた空洞がある、此空洞は卽ち中耳の一部であつて、こゝを鼓室とも稱する。此鼓室の中には槌骨砧骨及び馬鐙骨の三つの小さい骨卽ち小聽骨がある、此等の骨は互に關節によつて相連接し、且一方は鼓膜に接觸し、他の一方は內耳の方に連續し外界から來る音響に因つて鼓膜が振動するとそれが內耳に傳はる樣になつて居る。鼓室と咽頭卽ち俗に云ふ「ノド」との間には歐氏管と唱へる管がある、鼓室內の空氣は常に此管によつて、咽頭の空氣と交通し健康な人にあつては、これによつて絕えず鼓室內に新鮮の空氣が流通する。

鼓室より奧の方は卽ち內耳である、內耳は堅牢なる骨によつて保護され、內部には極めて複雜微妙な構造を有し、外界から來る音響を感受識別する機關が存在して居る、內耳にはまた身體の均衡を司る裝置もあるからして、若し內耳が破壞されると、音響を感受する能力が無くなる許りで無く、步行することも、直立することも出來なくなり、また强い眩暈が起つて、自分の周圍が廻轉する樣な感じが起り、其他吐氣を催す樣になるものである。卽ち我々の聽器は啻に音響を感受するばかりで無く、その他にも亦重要な官能を有つて居るのである。

以上の如く解剖上三部に別れて居るが其中外耳は外界から來る音響を迎へる裝置で鼓膜及び中耳は音を內耳に送達する官能を有し內耳は中耳から送達された音を感受しこれを神經の働きに依て腦髓內に感達する、この三部の何れに故障があつても聽力が惡くなり場合によりては(內耳に障礙があると)步行起立等にも差支へて來る。

病氣の注意

第二章　聽器の衞生

聽器の最も重要な部分卽ち內耳は、堅牢なる顳顬骨の內部に存在して居る故に外界より來る危險に遭遇することは餘り屢々で無いが耳翼、外聽道並に鼓膜等は比較的外部にあるからして、種々の外傷並に疾病に侵さるゝことがある、また鼓

室及び歐氏管は鼻腔或は口腔から侵入する病毒に感染する危險がある。聽器に最も危險を及ぼし易きものは、鼻腔及口腔に炎症を來す處の疾病例へば鼻加答兒咽頭加答兒の如きものである其他インフルエンザ、麻疹、猩紅熱、望扶斯等の傳染病に依て鼓室の炎症卽ち中耳炎を起す事が屢々ある斯く傳染病の經過中に起る中耳炎は性質が惡いから注意せねばならぬ。非常な寒氣のとき、または寒冷なる風の吹くとき、或は非常に溫度の變化の劇しき際には感冒に罹らぬ樣に注意すると共に、尙ほ耳の入口部に脫脂綿を詰めて置くが良い。また頭部を洗うた場合には、よく乾燥せる布で拭くが宜しく、洗滌中に水が耳の中に入らぬやうに注意せねばならぬ、殊に初生兒の沐浴の際には、此注意が一層必要である。初生兒の皮膚は極めて糜爛し易きもの故、水が外聽道に入り、其儘時日を經れば外聽道內の皮膚が糜爛して濕疹其他の疾患を惹起する虞れがある。

寒氣の注意

小兒は遊戲中小豆、南京玉、鉛筆、小石、散彈等を耳內に挿入することがあるから、父兄は注意して監視せねばならぬ。また大人でも耳內を搔く爲めに鉛筆を用ゐたり、或は楊子を用ゐたりなどして、其際に此等のものが耳の深部に入ることがある若し此等外聽道內の異物によつて、耳內の皮膚に創傷が出來た場合には時として其創傷からして黴菌が侵入して炎症を起すこともあれば、また化膿を來たす虞れもある故猥りに耳內をいぢることは嚴に慎まねばならぬ。異物が耳內に入つた際最も慎むべきことは、不熟練な人、または素人が此等の異物を耳搔き又は「ピンセット」を以て取り出さんと試みることである、其爲めに外聽道を傷けるばかりで無く、異物は却て益々深部に侵入して、遂には鼓膜を破りて鼓室に侵入し爲めに危險なる異物性中耳炎をも起すことがあるもの故、若し誤つて外聽道に異物を入れたる場合には其儘直ちに專門醫の處に行くと云ふことが何より必要なる注意である。

異物の注意

耳內に耵聹が蓄積して、外聽道を閉塞し、其爲めに高度の耳鳴を起したり、ま

耳垢の注意

たは耳の中が痒くなり頭痛眩暈等も起ることがあるが、斯樣の場合にも濫りに耳搔き其他のもので摘出を試みると、其の爲めに外聽道を傷け、または皷膜を損傷するばかりで無く、間々深部に病氣を感染させる惧があるから、出來得る丈け其使用を避け、專門家に就て適當の處置をして貰ふことが必要である。一體斯くの如く耳內の閉塞する程に耳垢の蓄積すると云ふのは、單純に耳內の不潔に因るのでなくして、矢張り一種の病氣であるからして、どうしても專門家の治療を受ければならぬ、單に耳垢の溜つたのだと思うて、此際濫りに油の如きものを點耳するのは却て疾病を製造する樣なものである。

中耳と咽頭を連接せる歐氏管は、鼻加答兒、鼻咽腔加答兒或は扁桃腺炎等のある際には、共に侵されて加答兒を起し耳鳴、聽力障碍等を起すことがある、又歐氏管の加答兒が段々進んで、遂に皷室まで侵されて中耳加答兒を起し、耳鳴がしたり、又は聽力に障害を來たすこともあるから、平生鼻腔及び咽頭の疾患に罹らぬ

高音の注意

やうの注意が必要である。

若し大砲の發射のときとか或は非常に强き音響を聞かればならぬ場合には耳を閉ぢてこれを保護するがよい、けれども耳を閉ぢることが出來ない時には、口を大きく開けて置くがよい、さもないと强音の爲めに皷膜が破れることがある。此際口を開けて居ると、音波は口腔の方にも入り、歐氏管を傳つて內部の方から皷膜に働く、卽ち音響は外聽道からと、內部からと、同時に皷膜に働く爲めに皷膜は破裂せぬものである。鍛冶職、機關師其他總て高音の中にて仕事する人は、常に耳に綿の栓を入れて保護することは必要である、さも無ければ長時日の間には、其響によつて耳が侵さるものである又此等の職務に從事する人は時々耳の檢査を受けなければならぬ、機關師の如きは殊に必要である。

打撲の注意

耳部を平手で毆打すると皷膜が破れることがある、此際に若し黴菌が入ると容易に中耳炎を起すものであるから、若し毆打を受けて聽力が急に惡くなつたと云

ふ樣な場合には、速に專門醫を訪ひ、適當の處置をして貰ふが良い、決して自分で紙捻子其他のものを挿入してはならぬ。素人は鼓膜が破れ、鼓膜に孔かあけば全然耳が聽えなくなる樣に考へて居るが、決してさうでは無い、鼓膜に裂創或は穿孔があつても、大して聽力の侵されざる場合もあるからして、假令鼓膜が破れたからとて、全く聽力を失つたと失望するには當らない。

聾啞の注意

聾啞には生來の聾啞卽ち先天性のものと、生後に起るもの卽ち後天性の聾啞とあるが、先天性に來る場合は兩親が神經性病者か或は聾啞者であるか又は血族結婚である場合に屢々起るものである。後天性のものは、多くは幼時の耳疾患の爲めに起り又猩紅熱、流行性腦膜炎の如き急性熱性傳染性疾患に密接なる關係があるものである。小兒が七歲以前に聽力を失ひたる場合には、通常言語を發することが出來ぬもので、其結果遂に聾啞となるものであるから、幼年者の耳疾患は成るべく早く適當の治療によつて癒すことが必要である。

初生兒に對する注意

初生兒は、出生後暫くの間は聽器の働きが充分で無い爲めに聽覺を有せぬものであるが全身の發育と共に漸次發達して、四週間後には通常音響を聽取することが出來、然も銳敏に反應するものである。そして生後五週間後には雜音の爲めに眠りを覺まし、七乃至八週日に至れば高音に驚き、三箇月に至れば音のする方に頭を向け、五箇月乃至六箇月になると音聲を識別するに至るものである。

初生兒若しくは哺乳兒を强く振り動かし、または高い音を聞かせることは避けねばならぬ、一體幼兒の耳は非常に銳敏であつて、極めて輕微な音にも感するものであるから、强い響きを受くるときには神經を刺戟してその爲めに遂には疾患を起すことがある。殊に慎むべきは、濫りに初生兒の耳邊に於て高聲を發することや、または高い音を發する玩具をナラさぬことである。

哺乳兒の哺乳の際には、動もすると乳汁にムセて、咳嗽を發し、又吐乳等をするものであるがかう云ふ場合に稍もすると乳汁が歐氏管を傳つて中耳の方に入り

其爲めに中耳炎を起すことがあるから注意せねばならぬ、外聽道の中に水が入いると直ちに中耳炎を起すやうに思うて居る人が多くあるが、實際は鼓膜が健全な限り以上は水は外聽道から中耳へ進入する事はない通常は歐氏管を傳はつて口腔の方から中耳の方に乳汁などが入つて中耳炎を起すものである、次に哺乳兒が咽頭喉頭、氣管等の病氣に罹り、屢々噴嚏又は咳嗽をする場合には、鼻汁乳汁が中耳内に入る機會が多いからして、早く其等の病氣を癒すことが必要である。

初生兒の外聽道の皮膚は極めて損傷し易きもの故假令耳内に不潔物を認めても濫りに耳搔き等を外聽道内に挿入して之を除去うと試みてはいけない。また沐浴の際には外聽道内に水或は石鹸等の入らぬやうに注意せなければならぬ、そして若し此等のものが入つた場合には、脱脂綿を小捻子の如くに捻つて、これを以て注意して靜かに拭き取るがよい。

學齡兒童に對する注意

學齡兒童に對しては常に教師並に醫師殊に耳科を修めたる醫師が精密に聽力並に鼻腔、鼓膜、咽頭等を檢査する必要がある、殊に入學の際に是等の點を檢査し若し聽力が大變悪いやうな兒童があつたならば、進んで其原因を訊れ、なるべく早く其原因を去られねばならぬ。

聽力障害と教育との關係

兒童の聽力障害は教育上重大なる關係がある、一體學齡時には鼻咽腔の扁桃腺口蓋扁桃腺の肥大に罹れるものが多く、然かもこれ等が聽力障害の原因となることが非常に多いから、若し斯くの如き原因の爲めに聽力が悪い場合には其原因たる鼻咽腔又は咽頭の扁桃腺を取り除く事が必要である、是を除去する手術は極めて簡單なものであつて幼年者でも大して痛もなく危險もなく除去する事が出來る これを除けば多くは其聽力障害は速に癒るものである。多くの人は此手術を怖れて醫師の勸めもきかずにいつまでも原因を除去しない爲めに啻に聽力が悪くなる許りでなく體質も薄弱になり遂には取返しのつかぬ事になるのを知らずに居る。

學齡兒童の中には、記憶力の悪しきもの、または理解力の薄弱なるもの、或は

また注意力を集注する事の不能なるものが多數にあるが、此等の中には他の原因によるものもあるけれども、鼻咽腔の扁桃腺肥大卽ち腺樣增殖症の爲めに來ることが頗る多いものである、この鼻咽腔扁桃腺肥大は、平たく云へば、鼻の奥卽ち鼻腔と咽腔との間に梅干のやうなものが出來て、その爲めに鼻呼吸が妨げられまた歐氏管が塞がれて爲めに中耳の方にも惡影響を及ぼして遂に聽力障害を來たすばかりで無く、絕えず口腔より呼吸する爲めに胸廓が惡くなり體質が薄弱となり咽頭加答兒・扁桃腺炎、氣管枝加答兒、實扶垤里亞又は肺結核等の疾患に罹り易くなるものである。故に之等は速かに治療してまだ惡影響の甚しくない內に除く事が必要である。

兒童が游泳または海水浴を爲さんとする際には、必ず耳內の檢査を受けることが必要である。而して若し鼓膜に穿孔があるときには、耳內に水の入らぬやう特に注意せねばならぬ水が入ると中耳炎を再發する惧がある。また耳漏のある場合

にも同樣の注意が必要である、聽力の非常に惡い小兒は游泳中教師の言葉が聞れぬ爲めに不測の禍に陷ることがある故豫め其點に注意し教師より遠く離れぬ樣にする事も必要である、水が中耳の中に侵入すると其爲めに病勢を進め甚しきは生命に危險を及ぼすやうなこともある、通常游泳をするには耳孔に綿の栓をするのである但し其綿に「オレフ」油を浸すのは宜しくない、其れが爲めに、反つて皮膚が爛れて外聽道の病氣を惹き起すことがあるから、それよりも固形「パラフキン」を溶かして、それを綿に沁み込まして作つたものを以て栓にする方が遙かに宜しいのである。

第三章　耳翼の疾患

第一　耳翼の凍傷

耳翼は、外部に突出でて居るから、從つて冷い風等に觸れ易いのみならず、割

合に血管に乏しいからして、長い間冷い空氣に觸れて居るとか、または非常に強い寒氣に遭ふと容易く凍傷に罹るものである。餘り長時間氷嚢で冷やしても凍傷にかゝるものである。

症候

凍傷の初期には、其部分が赤く腫れて痒いか又は痛いだけであるが、それがだんだんに劇しくなると、今度は皮膚が糜爛して潰瘍に陷るものである。尚ほ一層甚しくなると、今度は耳翼が落ちて了ふことがある。故に寒冷な場所に居つたり或は寒氣の劇しき場合には、耳翼を保護せねばならぬ。殊に幼年者にありては、父兄が注意してやることが必要である、即ち毛皮又は綿で耳翼を包み又時々摩擦して血行をよくすることも必要である。

手當法

凍傷の初期には、薄き沃度丁幾を其部分に塗布すれば癒る、併しこれは初期の時にだけ限るのであつて、若し病勢が糜爛潰瘍等に進んだ場合には、直ちに醫師に就きて適當の治療を受けなければならぬ、凍傷の爲めに後に耳翼の醜形を殘すことは屢々見るものである。

症候

處置

第二　耳翼の外傷

相撲、擊劍或は其他の機會に於て、耳翼を劇しく打たれたときには、其結果として耳翼が急に腫れて、普通の二倍或は其以上の大さになり、同時に痛みを感じ色が暗赤色になるが、これは耳血腫と稱するものであつて、耳翼内の血管が破れ組織内に出血した爲めに起つたのである。

かう云ふときの應急處置としては、疼痛が劇しいならば、氷嚢を其部に貼して冷すかまたは五十倍の硼酸水を以て罨法するがよろしい。耳血腫は放任して置いては容易に癒らぬばかりで無く容易く化膿するの虞れもあり、甚しく醜形を殘すものであるから、早く專門家の治療を受くるのが最善の策である。力士の耳を見ると屢々可笑しな形の耳翼を認むるが、これは多くは此病氣の結果である。

第三　耳翼の畸形

生れつき又は怪我等により耳翼に醜形を來した場合其他左右の形が甚しく相違し又大きさが不同である樣な場合には比較的簡單な手術で整形する事が出來るものである。

第四　耳翼の濕疹

種類

耳翼の濕疹は甚だ多く見る病氣であつて、これには二た通りの種類がある、卽ち其一は濕潤性濕疹で他の一は乾燥性又は落屑性の濕疹である。

小兒の濕疹

小兒には多く濕潤性の濕疹が來るものである、そして其出來る場所は、耳翼の附着線或は耳朶、または外聽道の入口等である。本症に罹ると、其部分は赤く糜爛して、其表面に痂皮が附着して居る、痒い爲めに、其處を掻くので、時に出血することがある。

原因

幼年者に起る濕疹の原因は、沐浴の際に、水を充分に拭き取らぬため、其他耳翼附近を不潔にして置くか或は刺戟性の藥品のため等である。予は哺乳兒に厚さ

厚着さして汗をかゝせその爲めに汗の刺戟によつて耳翼の附近に濕疹を起すこともある。また毛絲の編物、羅紗毛布其他の毛織等によつて、小兒をくるみ其等のものが絶えず耳翼附近に觸つて擦る爲めに、其刺戟に依て濕疹を起すことがある。

濕疹が出來ると、その部分が赤くなり少し腫れ且つ汁が出る、最初には通常其部分に灼けるやうな感じがあり、それと同時に痒みを覺ゆるので、哺乳兒などはために絶えず號泣して遂に睡眠も妨げられるに至るものである。

治療上の注意

濕疹は適當の治療によれば、比較的短時日の間に癒ゆるものであるが、若し治療の方法を誤まる、假へば不適當な膏藥を塗附するとか、または素人考へで種々の塗り藥をするやうなことがあると、其れが爲めに却て病氣は段々に擴がり、遂には頸の淋巴腺まで腫れ出し甚しきは其れが化膿して切開せねばならぬやうなことに至る故に、病勢の輕い初期に於て、早く適當な藥を用ゐて癒すと云ふことが必要である。

大人の濕疹

大人には通常乾燥性の慢性濕疹が多く生ずるものである。これは外聽道の皮膚の表面から頭垢のやうに皮が除去れる、これは非常に痒いものであつて痒みの爲めに睡られぬ程である、其部分の皮膚は通常肥厚して厚くなるものである。

治療上の注意

かう云ふ濕疹は通常慢性であつて、治療にも時日を要するものであるから、患者も醫師も共に忍耐力が必要である。勿論適當なる藥劑によつて全治するものであるが僅に二三度醫治を受けて、其れで癒るなどゝ考へては間違である、また一度醫者に診て貰へば、後は自宅で藥用しても癒ると云ふ考を持つて居る人は大變に多いやうであるが、通常それでは根治せぬものであるから、屢々醫者に診せて其病氣の容態によつて、藥を取代へて貰ふと云ふ風にするのが必要である。

第四章　外聽道の疾患

第一　耳垢蓄積（町聹栓塞）

町聹の分泌

外聽道の皮膚には、町聹腺と云ふ一種特別の分泌物を生ずる腺がある其分泌物は普通黃褐色にして恰も樹の脂の如き外觀を呈し、其味は苦いものである硬さは人によつて違ふものであつて、流れる程軟かいのもあれば、また乾いてぼろ〳〵した白色のものもある。此町聹の軟かいのは俗にじろ耳或は谷地耳と稱するが、これはみゝだれとは違ひ必ずしも病的と見做すわけには行かぬ、軟かくとも多くは一向健康上に差支の無いものである。

症候

町聹は生理上少量宛外聽道の入口の近くには分泌されるものであるが、それが種々の原因によつて、生理的以上に多量に蓄積し遂には外聽道の深部にまで一杯に詰ることがある、其爲めに頭痛、耳鳴がしたり又は頭の重いやうな感覺を起し甚しきは聽力に障害を起すこともある、斯樣な狀態は既に病的なのである。この町聹蓄積は世間に非常に多くある病氣であるが、これが長年放任されて居ると、其爲めに鼓膜が壓迫を受けて聽覺が漸次鈍くなるので、また絕えず頭痛を訴へるや

うになり、逆上の氣味があり肩が張り耳鳴がする其他耵聹の刺戟の爲めに、外聽道壁に炎症を起して非常に痛みを覺ゆることもある。

耵聹が外聽道内に一杯につまつて居ても知らずに居る人が多くあるが斯樣の人が水泳の際または沐浴の後に痛みもなく、發熱もなくて突然、聽力が惡くなることがあるこれは外聽道内に蓄積して居つた耵聹が水分に會つて、一時に膨脹した爲めに、外聽道を充塞して、其れが爲めに突然聞えなくなつたのである。

斯樣に種々の障害を及ぼす樣に、耵聹が外聽道内に詰まつた場合には、これを取り去らればならぬが、これを取り去るには、決して耳掻きや「ピンセット」の如きものを以て摘出を試みてはいけない、若し其樣なことをすると、硬くなつた耵聹が鼓膜に觸れて痛みを感じ又鼓膜を傷ける虞れがあり、また外聽道を傷ける虞れもある、これを取り出すには、微溫湯にて洗ひ出すのが、最も安全でまた確實の方法である。併し洗出す方法には一定の要領があつて、耳の解剖に精通した醫師でなければ充分其效を奏せぬものである、そしてまた耳の中の檢査法を心得たるものでなければ果して耵聹閉塞であるか、或はまた他の病氣であるかも判別することが出來ない。それにはまた洗滌したる後、完全に耳垢が洗ひ出されたか、或はまだ殘つて居るか、其他鼓膜が健康であるや否やなも檢査せればならぬからして畢竟耵聹栓塞の療法は專門醫の力に越したものは無い。

異物摘出の危險

第二　外聽道内の異物

外聽道内に異物が入つても、多くの場合に聽力並に生命に向つては何等の障害を與へず、また何等不愉快な結果を及ぼさぬものである、だからして外聽道内に異物が入つたまゝ二年も三年も過したと云ふ人は澤山ある外聽道内に異物が入つた際不熟練な人、或は醫學の知識の無きものが、それを取り出さうと試みたる爲めに、反つて異物を外聽道の奥の方に押し込み又は外聽道の皮膚を損傷し、甚しきは鼓膜を破り、益々其摘出を困難ならしめ、患者に非常な苦痛を與へることが

ある、また時としては異物が鼓室内に入つて、鼓室の重要な部分に損傷を來し、遂には劇烈なる中耳炎を起し又は腦膜炎を起して、死に至ると云ふ樣なこともある故に怖るべきは拙劣なる或は無暴なる摘出である此等異物は放任して置けば何等の障害も無かつたのに、不適當な摘出を試みた許りに、中耳炎を起し、或は腦膜炎を起さしめたるものであつて、其罪は全く摘出者にある、だからして素人が外聽道内の異物摘出を試みることは如何なる場合と雖も全然避けなければならぬ。

異物の種類

異物を大別して、生物と無生物の二つとなす生物としては油蟲、蚤其他の小蟲が耳内に入ることがあり、無生物無機物としては、小豆、小石、鉛筆等を遊戯中故意にかまたは誤つて耳内に入れることがある。其他齒痛の時に水天宮の御札などを入れることもあれば、外國にては齒痛の際に蕊を入れるものなどがある。

生物の入つた場合の手當

蚤、油蟲等の動物が耳内に入ると、外聽道内を匐ひ歩き、鼓膜の表面や皮膚面に觸れて甚だ煩いものである、さう云ふ場合には、煙草の煙を耳内に吹き込むか

無生物の入つた場合

或は「アルコール」を少し滴らし込んで、動物を弱ほらせると苦痛が輕くなるまた小豆や小石のやうなものが入つたときは、多くの場合痛みも痒みも無いものであるが長時日の中には時として皮膚に糜爛を起し、或は潰瘍を作り又は炎症を起し又異物が深く肉の中に喰ひ込む場合もある。

小豆小石の如き異物が耳の入口に見えて居つても、「ピンセット」などを以て摘出を試みる事は嚴禁である、若し「ピンセット」を以て摘出を試みると、必ず異物は深く外聽道内に入つて了ひ、遂には取るのに非常に困難になるものである、だからして假令異物が半分程外聽道から出て居る樣な場合であつても、決して手を觸れずに、熟練なる專門家に取つて貰ふことが必要である。

原因

第三　外聽道炎

外聽道炎は、甚だ屢々見る病氣であつて、外聽道の皮膚の中に病原菌が入りそのために腫物が出來る、黴菌は手指の爪、箸、不潔な耳掻き等で外聽道をいぢる

症候

際に、皮膚の中に入るのであるが、黴菌が侵入すると、其部分が赤くなり段々腫れて來る、同時に疼痛が劇しくなり、耳に障れぬ樣になり又熱も出る耳翼の周圍迄も腫れて來るものである。其他淋巴腺が腫れて痛んで來ることもあるが、其他外聽道が腫れ塞がつて聽えがまた耳の周圍に、一杯の膿が溜ることもあるが、或は悪くなる、小兒などは、三十九度以上の熱を發しひきつける事もあるまた時さしては腦膜炎の如き症狀を顯すこともある。

鑑別

外聽道炎は、中耳炎と違つて通常聽力には餘り故障を起さぬものである。外聽道炎では耳翼に觸れるとか、耳翼を牽引するとかすると非常に痛みを感ずるものであるが、中耳炎ではさう云ふことはない、故に外聽道炎と中耳炎とではこれによつて凡そ鑑別が出來るものである。併し中には、中耳炎と外聽道炎と同時に來る場合もあるからして、單にそればかりで確實に診斷するとは出來ぬものである。若し外聽道炎が起つたならば、應急處置として、五十倍硼酸水、または五十倍

應急處置

鉛糖水を「ガーゼ」に浸して、それを耳部全體に貼て置くが良い、局部の治療は專門醫の治療を受けるがよい。

第五章　鼓膜の損傷

間接損傷

平手で耳を打たれ、或は耳の近くまで發砲された爲めに鼓膜が破れる場合があるこれを鼓膜の間接損傷と云ふのである。間接損傷のときは、普通痛みは餘り劇しくないが一時聽力が甚しく鈍くなり、また時としては、血液が外聽道から流れ出て來ることもある。

處置

若し鼓膜が間接に破れた疑があつたならば取敢へず清潔な脱脂綿を耳の入口に詰め外から水或は其他の不潔物の入らぬやうにし速かに醫師に就て適當の處置を受くることが必要である。自分で耳の中に耳掻きを入れたり、或は紙捻又は綿や藥液等を挿入する事は嚴禁である、何故なれば、其爲めに却て化膿性中耳炎を起

直接損傷

す虞れが非常に多いからである。

耳掻き或は編ハ棒、かんざし等を耳の奥に入れて、其爲めに誤て鼓膜の損傷を來すことがある。これは鼓膜の直接損傷と云ふものである。此場合には間接損傷とは違つて通常痛みが非常に劇しく出血もある。

處置

此の場合に於ても、唯だ清潔なる脱脂綿を耳の入口につめ、速に專門醫の治療を受くることが必要である。直接損傷の場合には、通常化膿性中耳炎を續發するものと覺悟せねばならぬ、なぜなれば耳掻き、かんざし等に附着せる黴菌が中耳内に入るからである。

鼓膜の穿孔損傷の後又は中耳炎の治したる後にいつまでも鼓膜に穿孔を貽す事がある其穿孔が小さき場合には或る治療を施せば鼓膜が孔の周圍から新成して遂には其孔が塞がるものであるが穿孔が大きな場合には此等の治療を施しても容易に目的を達する事が出來ぬ斯かる時には往々人工鼓膜を耳内に挿入し或程度迄聽

原因

力の恢復を得る事が出來る然し容態によりて人工鼓膜の奏效する場イと奏效せぬ場合とある、人工鼓膜にも色々の種類がある、之等は一々專門醫の診査に依頼するがよい。

第六章　中耳の疾患

第一　歐氏管の狹窄及び閉塞

歐氏管は、前に解剖の處で話した如く、鼓膜の奥にある鼓室と鼻の奥の鼻咽腔とを通ずる管であつて、其内面は粘膜で被はれて居る、健康時にあつては、空氣を通ずる處のものである。試みに鼻を摘みていきむと耳の方に壓を感ずるのは空氣が歐氏管を通じて鼓室の方へ行くためである歐氏管は鼻腔内の疾患例へば肥厚性鼻炎、或は慢性鼻加答兒等の爲め、若くは鼻咽腔の疾患、例へば腺樣增殖症、鼻咽腔加答兒のため、其他歐氏管自身の病氣の爲めに狹窄或は閉塞を來すことが

ある。

歐氏管が狹窄或は閉塞を來たせば、鼓室內空氣の換氣作用が出來ぬ爲めに空氣が漸次組織內に吸收され同時に鼓膜が外氣の壓力の爲めに壓されて內方に陷沒し運動が鈍くなり從て音の振動を傳へる働きが惡くなるため、聽力障碍を起すそれのみならず鼓室內の血管が擴がり、漿液が溜まる樣になる等、の關係からして益益聽力が侵されるものである。學齡兒童の中には、聽力の惡いものが多數にあるが其等の多くは、此の歐氏管閉塞の爲めであつて、其歐氏管閉塞は大抵鼻咽腔の腺樣增殖症によつて起るものが多い。また大人に於ては、慢性鼻加答兒或は副鼻腔の蓄膿症、其他鼻咽腔の疾患を放任して置く爲めに歐氏管に病氣が傳播して、遂には聽力の障害を起すやうになるのである。歐氏管に故障があつて聽力の惡くなつた者は天氣の具合によりて時々聽力がよくなり又惡くなり一日の內でも午前午後によりて時々聽力に變化を來すと云ふ事が特徵である。

歐氏管の狹窄を癒す場合には狹窄の原因を除くと云ふことが第一に必要である卽ち小兒に於て腺樣增殖症が原因で歐氏管狹窄を來せる場合には、其原因たる腺樣增殖症を手術に依て除去する事が急務である。また慢性鼻加答兒或は鼻咽腔加答兒が原因となつて、歐氏管狹窄を起した場合には、其原因である慢性鼻加答兒或は鼻咽腔加答兒を癒すことが必要である。斯く原因を除去し然る後に歐氏管狹窄の治療を行ひ、聽力の恢復を謀るのが治療の順序である。

一體吾々の聽力を計るに懷中時計のセコンドの音を標準とする事が廣く行れて居るが此方法は決して良好なる聽力檢査法でない、時計のセコンドの音は一種の雜音であつて且其調子が高い吾人の日常生活に於ては斯樣な高い音よりも寧ろ談話が滯なく聞える事が最も必要な事である、檢査する際第一に試驗すべき事は人の聲が聞えるや否やの點であるこれを試驗するには一定の距離を隔てゝ小さな聲で人名地名又は數字を話して行ふのである。

簡便なる聽力試驗法

今其試驗法を簡單に云ふと、被檢者は何時も試驗さるゝ耳の方を、檢査する人の方に向け、顏面を眞直にし檢者の方を見ぬ樣にし、一方の耳を濡れた指で堅く詰て置く、其處で檢者は最初三四間離れた處から「淺草」とか「日比谷」とか云ふ風に所の名か、または「三十五」とか「四十二」とか云ふ數字を耳音で話す、若し其れが聞えたならば、被檢者は直ちに高聲を以て「淺草日比谷、三十五、四十二」と反復するこれ卽ち檢者の音を聽き得た證據である若し聽得ぬ時は檢者は靜かに被檢者の傍に近寄つて耳音を以て反復檢査を行ふ健康者は六間位離れても優に聞えるものである。聽力が極めて高度に侵された場合には耳音は聞えぬから普通の談話音で同樣に檢査する。

送氣療法

歐氏管狹窄の治療は無論專門家によつて種々の方法によりて行ばるべきものであるが、治療の一つの方法として鼓室內に空氣を送入する方法がある。此方法を行ふにもいろ〳〵特別な器械があるが、器械は患者自身使用が出來ぬ。患者が自身で出來る最も簡便な方法は鼻をつまんで息むのである、さうすると空氣は歐氏管を通りて鼓室內に入る、空氣が鼓室內に入ると今迄陷凹して居つた鼓膜が一時元の位置に恢復して、同時に音の傳達力が善くなり、從つて聽力が一時恢復するものである此方法は簡便であるが、餘り度々やつてはいけない、先づ一日に一回か二回を極度とするのである。またあまりつよく息むと鼓膜が薄いから破れる虞れがある歐氏管狹窄は單にこれだけでは決して癒らぬ先にも云うた如く原因をのぞいた後も適當な療治を早く受くるがよい、餘りくるしが第一必要である原因をのぞいた後も長く放任して置くと治癒が困難になるものである。世間の人は年を老ると、年の故で耳が聞えぬとて聽力の惡くなつたのを放任して置くことが多いが、其內に隨分歐氏管狹窄等の爲めに聽力が弱つたのも多くある、此等は適當の治療によつて恢復するものであるから、決して年の故など放任せずに、一應專門家の檢査を受くることが必要である。

老人の注意

種類

中耳炎は其容態並に經過によつて種々に分類することが出來る。先づ經過上から大別して急性中耳炎と慢性中耳炎となし、また鼓膜の狀態によりて分類すると鼓膜に孔の穿いて居るのと、穿いてないものと二つに分つ、卽ち穿孔性中耳炎と單純性中耳炎とに分類さるゝものである、何れにせよ其病竈の位置が腦に甚だ近接して居るから、容易く腦膜炎を起すの虞れがあつて極めて危險な疾患である。

原因

急性中耳炎は、感冒又は鼻感冒、咽頭加答兒、扁桃腺炎等の病氣の際に續いて起り、また哺乳兒に於ては吐乳によつて來り其他大人に於ては鼻を洗つた際に不潔な水が、歐氏管を傳はつて鼓室内に入りそれに中耳炎を起すこともある。其他急性熱性傳染病例へば猩紅熱、麻疹、窒扶斯、流行性感冒等の經過中に中耳炎の起ることが屢々ある、此熱性病の經過中に起る中耳炎は一般に性質が宜しくない黴菌が歐氏管を傳はり又は血管の媒介によりて中耳内に入り劇烈なる中耳炎を起すのである。併し鼓膜が健康である以上は單に外聽道内に水が入つた許りで直ちに中耳炎を起す事はないものである然し鼓膜が破れて居ればそこから水が中耳内に侵入して中耳炎を起す事がある、若し鼻加答兒、咽頭加答兒等に侵された場合には決して鼻を強くかんではならぬ、鼻を強くかめば、鼻汁が歐氏管から中耳内に侵入して其爲めに中耳炎を起すことになる。

豫防法

急性中耳炎が起ると通常劇しい耳痛と高度の發熱があり時として四十度以上の熱が出る事もある。其他耳鳴聽力障碍頭痛等を起して來る、子兒は時としてひきつける事もある。

症候

若し急性中耳炎に罹つた場合には、通常痛みが非常に強い故應急處置として、耳部全體に氷嚢をあてるか、或は五十倍の鉛糖水の罨法を行ふがよい、其他氷枕をすることなども宜しく又耳の後ろに水蛭をつけるもよい、そして一方には信頼すべき專門家に就て適當の治療を受けるがよい急性中耳炎は其治療を誤ると甚だ

應急處置

治療上の注意

危險な狀態に陷り時としては後悔しても及ばぬ結果を來すものであるから、必ず專門家の治療を受くることが必要である。急性中耳炎の經過中突然痛みが去り、同時に耳の中から濃い粘液性膿樣の汁が出ることがある、これは鼓膜に孔の穿いたのであつて、卽ち單純性急性中耳炎が穿孔性急性中耳炎になつたのである、此際には俄に疼痛も去り一時心神の爽快を覺ゆるものであるが、併し必ずしも病氣の輕快と認める譯には行かぬ從て此時期にも決して油斷が出來ぬ、中耳炎の危險の程度は穿孔した場合でも隨分大なるものである故に時機を失はぬ中に專門家の治療を受くることが大切である。急性單純性中耳炎卽ち鼓膜に穿孔せぬ中は高熱と疼痛の爲に患者の苦痛が非常であり且又危險も大なる故此等の苦痛危險をのぞく爲めに鼓膜の切開を行ふ事がある卽ち治療の目的を以て鼓膜に孔を開けるのである斯く治療の目的を以て適當の時期に鼓膜を切開した場合には中耳炎の治癒も早く危險も免かれ得る、切開した傷は後に痕跡なく治るのである、急性中耳炎の

慢性症の原因

場合に聽力を檢査して見ると多少の障害がある、併し耳翼に觸つても別段に疼痛を訴へぬものであるから、これによつて外聽道炎か中耳炎かと云ふことを凡そ區別することが出來る。

急性中耳炎の治療の時機を失するか、或は何等治療を施さぬ場合には遂には慢性化膿性中耳炎卽ち俗に云ふ「耳だれ」になるものである。俗間には、耵聹の軟かいのも耳漏と云ひ、また外聽道の濕疹の爲めに分泌物が出るのも耳漏と云つて居るが、併し本來は慢性化膿性中耳炎で鼓室から膿汁の出るのを耳漏と稱へる。

慢性化膿性中耳炎に於ては其疾病の經過長く又鼓膜には大なる孔が穿いて居つて、其孔から常に膿汁が出る、猩紅熱、麻疹等の熱性病の經過中に起つた急性中耳炎は稍もすると慢性になる傾向を持つて居る。また結核性の人に來た中耳炎も矢張慢性になる事が多い、其他鼻咽腔に腺樣增殖症があるがこれまた慢性になる事が多い。

慢性中耳炎は急性中耳炎に比べると、治癒が遙かに困難である、故に急性中耳炎の時期に速かに癒すことが大切である。

耳漏の危險

慢性化膿性中耳炎の經過中に種々の黴菌が中耳内に入り爲めに膿汁が惡臭を放つ樣になる、のみならず周圍の骨が侵蝕され知らず識らずの中に病竈が腦の近傍に達し遂には腦膜炎を起して救ふ可らざるに到る事がある。

症候

本症は急性の時と異なり通常耳漏もなく又發熱もないが、聽力が甚しく障害され又耳内より惡臭ある膿汁を排出し、時として頑固な頭痛、又は眩暈を訴へることがある、神經を過度に用ふる爲めに容易に神經衰弱に陷り又仕事に熱中すると記憶が出來なくなる。學齡兒童にあつては、其爲めに惡くなり、學業の成蹟も惡いのみならず、絶えず腦の病氣を起す危險がある其他高度の聽力障害を貽す懼がある故初期に於て充分治療を施す事が大切である。現今でも地方に行くと耳から膿汁が出るのは、胎毒が出るのであると云うて平氣でかまはずに居る人があるが、此等は全然誤つた考であつて、決して胎毒が耳から出てその爲めに丈夫になると云ふ事はないから速かに適當な治療を受けるがよい若しそれを構はずに置くと子兒が成人の後に非常な不幸なものとなるからよく〳〵注意せねばならぬ。

根治手術

慢性化膿性中耳炎は、其容態又は性質によつては手術を行はれば到底排膿が止まらぬのみならず其人の生命に危險を及ぼすことがある、斯かる場合には所謂中耳の根治手術によつて危險を除き、排膿を止むるのである。此手術は專門的の手術であつて充分熟練した醫師に依て行はるべきものである此手術の後の後療法は大に注意を要するもので後療法の適、不適によつて治癒の日數に非常に差異を生じ又時としては全然治らぬともある、手術の傷が全く治る迄には相當の時日を要するもの故患者も忍耐して充分なる後療法を受くる事が必要である。

第三　急性乳嘴突起炎

中耳炎の經過中に耳翼の後方の骨を壓すと痛んだり、或は特に頭痛が增して來

たり、又は耳の後方若くは周圍が腫れて、其處が大變に痛むことがある、これは即ち急性乳嘴突起炎である、即ち乳嘴突起と云ふ骨の中に化膿が起つたのである此場合には速かに專門醫の外科的治療を受くることが必要である。然らざれば膿汁が腦の方に侵入して腦膜炎、腦膿瘍等の危險なる病症を起す虞れがある。適當の時機に外科的手術を行へば治療の效を奏すること確實である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

内耳炎

若し中耳炎があつて、急に烈しい眩暈、嘔氣、嘔吐其他耳鳴等を起した場合には、それは内耳炎の方に病氣の進んだ徵候である。斯かる時には患者は出來る丈け安靜にし專門家を招いて適當の治療を受くべきである。

中編　鼻衛生と鼻疾患

第七章　鼻の構造と其官能

第一　鼻の解剖

鼻腔

鼻は顏の中央に位し前から後ろにつき抜けた空洞である、此空洞は鼻中隔と稱する板狀の仕切があつて左右に別れて居る、空洞は解剖上鼻腔と稱へるものである此鼻腔の周圍は骨でかこまれて居る、唯鼻の尖端の部分は皮膚と軟骨とより出來て居る故比較的柔軟である。

甲介

鼻腔の内部は決して竹筒の如き空洞ではない内部には下甲介、中甲介、上甲介の突出したる部があり夫によつて空洞の形が複雜なるものとなつて居る尙其外に嗅覺を司る部分もあり又鼻腔に隣接して存在せる副鼻腔との交通路も開いて居る

副鼻腔

鼻腔の周圍には副鼻腔と稱へる四種類の骨の空洞がある鼻腔の兩側には上顎竇

と稱する副鼻腔があり鼻腔の上部で眉毛の附近には前額竇と云ふ副鼻腔がある其他篩骨蜂窩、蝴蝶骨竇と稱へる副鼻腔が奥の方に存在して居る、此等の副鼻腔内に膿がたまると蓄膿症を起すのである例へば上顎竇蓄膿症の如き夫れである。

鼻腔の入口卽ち通常鼻の孔と稱ふる部は皮膚で掩はれて居り玆には多數の鼻毛が生じて居る此部分を鼻の前庭と云ふ前庭より奥の部分は粘膜を以て掩はれ淡紅色を呈し居る其粘膜は特別の構造を有し殊に或部分の粘膜は甚しく血管網に富み爲めに血液の集散に依て容積が種々に變化する、卽ち海綿樣伸縮を呈する故に此血管網を特に海綿層とも云ふ逆上た時に鼻がつまり又長時間頭を下げて書物等を讀むと鼻がつまるのは此血管網に充血して鼻腔が狹くなるためである。

鼻腔の粘膜面からは粘液が分泌される、そのために粘膜面は常に濕潤て居る。

第二　鼻の生理的機能

鼻腔は一は嗅管としての機能一は呼吸道としての機能を有して居る卽ち生理上

二樣の機能を有し尙其外に言語構成に密接なる關係を持て居る。

嗅管としての機能は種々の物の香臭を嗅ぎ分けるのであつて薔薇の芳香も魚肉の腐臭も皆この嗅覺によつて識別する又有毒な瓦斯危險なる瓦斯刺戟性の瓦斯等も一々嗅覺に於て感知し是等の瓦斯が深く呼吸道に進入するを防ぐ卽ち鼻腔は呼吸道の門衛の役をなして居る、其他物の腐敗せるや否やも多くは嗅覺にて知る事が出來て居る、其他嗅覺によつて火災の危險を豫知し或は嗅覺によりて芳香を感知し神心の爽快を味ふ事が出來る殊に重要なるは嗅覺と味覺との密接なる關係であつて飲食の際嗅覺が働かぬ時は食物の味は甚しく損ぜられ食物の種類によりては全然味が分らなくなり爲めに食慾が減じ營養上大なる影響を及ぼすに至るものである。以上の事を考ふると鼻腔が閉塞するか又は他の病氣のため嗅覺を失つた際には吾人の生活上如何に危險な事であるかゞ分ると同時に鼻腔が吾人の生活上甚だ重要な器官である事を知る事が出來る。

鼻腔は又呼吸道として重要なる機能を有する、元來鼻腔は本來の呼吸道であつて口腔から呼吸する事は不自然な呼吸である今外界から塵埃多き空氣が鼻腔へ進入すると先づ鼻腔前庭に簇生して居る鼻毛に依て塵埃の一部が濾過される卽ち空氣があらごしされる譯である空氣が更に進んで鼻腔内に入ると今度は濕潤した粘膜面に觸れ其際空氣と共に進入した微細な塵埃や黴菌が粘膜面に附着し夫に依て空氣が更に清潔となる、之と同時に鼻腔内の複雜した道を通過する間に空氣が適度に溫められ且つ外界の乾燥した空氣が此間に一定の濕度を得る斯の如く空氣は鼻腔内に通過する事に依て精練せられるのである、吾人は日常この精練せられた空氣を呼吸するので初めて健康を保つ事が出來る若し鼻腔に故障があつて鼻から呼吸する事が出來ず口腔からのみ呼吸する事になると空氣の精練が出來ず塵埃黴菌等の澤山混じた空氣が乾燥した儘で直ちに喉頭、氣管の内に入るのであるから喉頭加答兒、氣管支加答兒、肺炎、肺結核等を起し易き事は誰にでも容易に考へ得られる事である吾人が嚴冬の時も酷暑の時も何回となく呼吸して居つて其割に呼吸器の病氣にかゝらぬのは全く鼻腔内の巧妙なる解剖上の構造と生理的機能の賜である故に鼻腔内に突出したものが有て空氣の通路が複雜になつて居るのは生理上重大な意味を持て居るのである然るに多くの人は鼻が少しつまると醫師の勸告も聞入れず頻りに手術を熱望し其際醫師が手術の要なき事を云ふと大に之を恨みとし手術を受け鼻腔内を竹筒の如き空洞にされると大に滿足する、これは甚しき誤りであつて斯くの如く輕卒に鼻腔内手術を受ける時は其當時は快い樣に感ずるけれ共暫くして種々な故障を來し悔いても及ばぬ結果を來すものである。

鼻腔は談話の際重要な關係を持て居る吾々の言語を發する際には空氣が一部は口腔から出るが一部は鼻腔に出で其際は鼻腔は共鳴器として働きそこで初めて音色が出るのである、鼻腔が閉塞した場合に音に響きがなくなる卽ち「閉塞性鼻聲」となる外國にては斯くの如き聲を「死聲」と稱へて居る、其外談話の際息苦しくな

り聲が早く疲れ又喉頭氣管の病氣を起し易くなる、之に依て鼻腔が音聲を發する際重要な關係を持つて居る事が分る。

第三　鼻の衞生

前章に於て述べた如く鼻毛は空氣中の塵埃等を濾過し又昆蟲等の侵入を防ぐのであつて一つの防禦裝置と見るべきものである故に鼻毛は保存して置かねばならぬ然るに我國に於ては理髮の際鼻毛を剃るのが殆んど風習の樣になつて居つて多くの人は切角自然に造られた防禦を猥りに剃り落して平氣で居る、中には鼻毛を剃つた爲めに鼻腔内に加答兒其他の病氣を起して困つて居る人もある夫等の人は鼻毛の無きため塵埃や黴菌が外界より直ちに粘膜面に觸れて諸種の病氣を起すに氣がつかずに居るのである、注意すべき事は鼻毛を剃る機會に不潔な剃刀等のために黴菌が皮膚の内部に進入し腫物を生じ或は剃刀の傷より丹毒の發生する危險がある之等の點より考へても鼻毛を剃る事は甚だ非衞生的な事であるのか明白

鼻毛を剃るな

に分る。

鼻毛の簇生して居る部分卽ち鼻腔の前庭は指頭、又は指爪其他のもので觸れる事が多い、其機會に爪又は指の媒介によつて種々の黴菌が皮膚内に入り腫物を生じ甚しきは梅毒、結核等の怖るべき疾患も傳染する惧がある故に濫りに不潔な爪等で搔く事は大に愼まねばならぬ。

又指先或は爪を以て鼻中隔の前端をいぢると其部の粘膜に傷がつき容易に出血を來す恐れがある此部分は血管が集合して居る所であつて輕微の損傷を蒙つても直ちに出血する此部分に痂皮が出來る事がある其痂皮を氣にしてむしり取ると出血は勿論の事遂には軟骨に迄孔があいて丁度曳牛の樣に鼻の隙子に孔が穿く事になる。

創傷の注意

刺戟性の瓦斯又は不純の空氣を鼻から吸入すると粘膜に充血を來し嚏を發し鼻汁が澤山になり遂には鼻加答兒を起す樣になるから斯かる瓦斯は吸入せぬ樣にす

哺乳兒に對する注意

ろがよい。

鼻腔が本來の呼吸道である事は前にも話したが其證據とも見るべきは初生兒若くは哺乳兒が全く鼻ばかりで呼吸する事である一さたび初生兒、哺乳兒の鼻腔が塞がると幼兒は呼吸に非常の困難を感じ哺乳する事も出來ず又睡眠する事も出來なくなる、ために身體が甚しく衰弱し遂に危險の狀態に陷る事もある、故に幼生兒の鼻は注意して病氣にならぬ樣にするが必要である殊に寒い空氣にあたり又は不潔な物が入りて鼻加答兒や鼻の實扶的里等にかゝらぬ樣にする事が緊要である。

鼻汁過度の注意

健康なる鼻腔からは通常鼻汁か流れる樣な事はない小兒の中には青鼻を二本垂らして居るものがあるが之等は鼻内に病氣があるのであるから早く專門家に見て貰ふがよい。

子兒は遊戯中小豆、小石等を鼻内へ入れ遂には取れなくなつて鼻腔内で腐敗する樣な事がある故此點に就ても充分の監視が必要である。

鼻腔洗滌の注意

鼻腔を水で洗ふがよきや否やは屢々受ける質問であるが適當の注意を拂つて行へば大なる害はない、眞水で洗ふと初めの中は痛みを感ずるが漸々慣れると痛みも感じなくなり遂には毎朝洗面の時に洗はぬと氣分が惡い樣になる多くの學者の說によると眞水で洗ふと嗅覺が鈍くなる、薄い食鹽水ならば先づ害がないとの事である吾々は夏期中游泳をする際鼻腔内に河水又は海水が進入するがそのために非常に害ある事を感じた事がない然し學理上から云ふと食鹽水の方が無論宜しい唯注意すべきは鼻腔内に入りたる水が容易に歐氏管を經て中耳内に入りそれが爲に往々中耳炎を起す事がある此危險を豫防するには鼻用噴霧器を用ふるがよい。

藥液吹入の注意

噴霧器を用ゐて食鹽水を吹入するならよいが時として噴霧器で藥液を無暗に鼻腔内に吹入する人がある之は大に愼むべき事で藥液の中でも殊に「鹽酸古加乙涅」の如き毒藥を猥りに吹入すると遂には中毒症を起し救ふ可らざる狀態に陷るものである、故に若し病氣のため止むを得ず藥液を吹入する場合には醫師の命令を守

藥液塗布の注意

り醫師の監督の下に行ふ事が必要である。

其他素人が自分で器械を用ひ鼻腔内に藥液を塗布する事があるがこれも愼むべき事である鼻腔を觀察し其病的變化のある部分に塗布して初めて效のあるものであつて自分で盲ら滅法に塗つても害多くして效少なきものである、鼻腔の内には藥液の觸れては害ある部分がある、其他藥液の種類に依ては中毒の危險がある故自分が藥液を塗布する事は大に愼むべきである。

鼻の手術に就て

素人の中には自分の不勉強不攝生のことを忘れ記憶力の惡いのは唯鼻病のためであると思ひむやみに鼻内手術を醫師にせまる人があるが之れは大なる誤りである記憶力減退は鼻の病氣によつても起るが然し外の原因でも容易に起るものである鼻内にある組織は病的ならざる以上悉く生理上重要な機能を有して居るのでこれをみだりに切除するが如きは大に愼まればならぬ事である。鼻内の手術は他の手段の盡きた最後の方法として行ふべきものである。

嗅覺の練習

嗅覺は練習に依て一程度迄は鋭敏にする事の出來るものである故に嗅覺の鈍き人はつとめて種々の匂ひを嗅ぐがよい。

第八章　鼻前庭の疾患

第一　濕疹

症狀

鼻毛の生えて居る部分即ち鼻の前庭には、濕疹が屢々起るものである、濕疹が起ると其部分の皮膚が爛れて、其表面に痂皮が出來る從て鼻呼吸に差閊るやうなことになつて來る、のみならず其部分が痒くなり、または硬ばつて氣になる爲めに手指の爪などで不知不識の間に痂皮をむしつて取る、然し翌日になると、反つて以前よりも大きな痂皮が出來て、益々濕疹が擴がり、症狀も甚しくなるものである

原因

此濕疹は、鼻腔の奥に何か病氣があつて、其分泌物の刺戟によつて起る場合もあり、また不潔なる手指を以て鼻をいぢる爲めにも起り、其他不潔なる剃刀によ

療法

つて起る場合もある、だからして平素鼻腔内に手指を入れる癖のある者は、其惡癖を矯正するの必要がある。

鼻腔の奥に病氣があつて、其爲めに濕疹の生じたる場合には、鼻腔内の病氣を先きに治療しなければ、濕疹は癒らぬものである。若し濕疹が出來た場合卽ち鼻孔入口部に痂皮の出來た時、または其部分の皮膚が糜爛した場合には、つとめて其處の皮膚に觸れることを避け、殊に痂皮を氣にしてむしり取るなど云ふことは大禁物である。濕疹の輕症なるものにあつては、觸らぬ樣にして置くと畢にそれだけで癒り痂皮も自然に落ちて了ふものである。

治療上の注意

若し痂皮が澤山出來た場合殊に、哺乳兒にて痂皮の爲めに鼻腔が全く塞がれて呼吸が出來ぬ樣な場合には、其痂皮の一部分を靜かに除き五十倍の白降汞軟膏又は硼酸軟膏を塗つて置く、鼻の入口部の濕疹は、容易に周圍に擴がり易い傾きを持つて居る故、早く專門家に就て適當の治療をして貰ふことは必要である。總て何れの部分の濕疹でも、其時期によつて治療法は異なるものであるから、一度醫者に診て貰つた丈けではいかぬものである、時々診察を受け、時期に適した藥を用ゐねばならぬ。

症候

第二　前庭の腫物（癤）

鼻の入口に時として非常に痛い腫物が出來ることがある、此腫物が出來ると鼻の尖端に一寸觸つても痛む、從つて鼻汁をかむことも出來ぬやうになる。時として此腫物の爲めに上唇が非常に腫れて來る場合もある、これは卽ち癤と云ふ腫物であつて、其上唇全體が腫れて來ると、通常面疔と云うて恐れられて居るものになるのである。これも不潔な指頭又は爪其他不潔な剃刀などが媒介となつて黴菌が毛根に侵入して、遂にかゝる腫物を起すやうになるのである。

原因

かう云ふ腫れ物が出來た場合に、自分で氣にして其れないぢると、其腫物が急にひどくなつて所謂面疔となり、遂には腦膜炎、膿毒症等を起して死ぬやうなこ

があるから、自分では、決して腫物を壓したり、ヒッ掻いたりしてはいけない。假令腫瘍の尖端に膿點が見えて居つても、それを無理に壓し出す樣なことをしてはならぬ、若し其樣なことをすると、反つて其れがひどくなる、面疔で人の死ぬなど云ふのは、多くはさう云ふことをした爲めであるから、自分では決して腫物に觸れない方が安全である、けれども疼痛が餘り劇しいやうな時には應急處置として脫脂綿塊に五十倍の鉛糖水を浸して、其れを鼻の孔に詰めて置くがよい、さうすると、一時痛みは樂になるものである、斯く應急處置をして置いて、更に專門家に診療を請ふのが安全である。

便祕の癖のある人は此腫物が出來易いから、さう云ふ人は、常に便通を良くすることが必要である。また糖尿病に罹つて居る人にも、かういふ腫物が大變出來易い故注意を要する。

第九章　鼻腔内の疾患

第一　急性鼻加答兒（一名鼻感冒）

原因　急性鼻加答兒は、空氣中、または鼻腔内に潛伏せる黴菌によつて起り、また刺戟性の瓦斯を吸入した爲めにも起る、此病氣に罹ると鼻腔内の粘膜が充血して赤くなり、且腫れて來る、同時に分泌物が增して來るので水鼻汁が澤山に出る。また鼻呼吸が妨げられ從て音聲は鼻聲となる、其他前額部に疼痛を感じ、または頭痛がして業務を執ることがイヤになり其外鼻腔内に灼熱の感或は痒痒の感が起る事もある。

症候　急性鼻加答兒に罹ると、鼻からの呼吸が出來ぬ爲めに、口腔呼吸を行ふやうになる從つて咽頭の粘膜が乾いて咽頭が痛む、また鼻腔が塞がる爲めに物の匂ひを感ずることが出來ず、從つて物の味が分らなくなつて、少しも旨くない、爲めに

感冒は萬病の基

食慾が起らなくなる。其他鼻感冒の爲めに涙管の病氣を起したり、また歐氏管の粘膜に加答兒を起し、それがだん〳〵奥の方に進んで中耳炎を起すこともあり。又喉頭粘膜に異常を來たし、更に下方に進んで氣管枝加答兒を起すこともある。だから急性鼻加答兒は、一口に鼻感冒として輕い病氣のやうに思はれて居るが、其實はなか〳〵油斷のならぬ病氣である、鼻感冒が原因で種々な病氣を起し得るものであつて、昔から感冒は萬病の基と云はれて居るが、實に尤もなことである。

殊に哺乳兒が急性鼻加答兒に罹ると時として一命に拘はる事もあるものである。一體我々の本來の呼吸の道は口腔ではなくして鼻腔である、試みに產れた儘の小兒をみると總て鼻腔で呼吸して、口腔からは決して呼吸をしない、だからして乳を哺みながら靜かに呼吸することが出來るのである。然るに哺乳兒が一朝急性鼻加答兒に罹つて、鼻呼吸が出來なくなつた場合には、唯一の呼吸の道が閉塞されるのであるから非常に苦悶して殆んど窒息するに至るものである。併し多くの

場合には、哺乳兒と雖も、餘り困しい爲めに時々口を開いて、口から呼吸する樣になるからして、直ちに窒息する虞れは無いとしても充分哺乳することは出來ない、卽ち營養を取ることが出來なくなる。乳嘴を啣へやうとすると、直ちに呼吸道が塞つて呼吸が出來なくなるから急いで乳嘴を放して了ふ、さう云ふやうなことで小兒の營養は著しく惡くなり、小兒は非常に弱るものである。尙ほ困ることは鼻呼吸の出來ぬため哺乳兒が安眠出來ぬことである、小兒が眠らうとすると、呼吸が困難になるので直ちに目を覺し、どうしても熟眠することが出來ず頻りに號泣する母親も夜通し守をせねばならぬ。斯く呼吸困難と、營養障害と、睡眠不足との三つの事柄が長く續くと、小兒は見る〳〵間に衰弱して遂には一命にも關はることになるのである、故に哺乳兒の急性鼻加答兒は哺乳兒に取りては重症と考へるのが至當である、從つて一日たりとも其治療を怠かせにすることが出來ない。哺乳兒の急性鼻加答兒の治療は、專門家に於てもなか〳〵困難なものである

鼻つまりの注意

殊に兩親が黴毒若しくは淋疾に罹つて居つた爲めに、小兒に淋毒性の鼻加答兒、或は黴毒性の小兒に來る鼻加答兒などは、なか〳〵頑固で容易に癒らぬ場合がある、だからして斯樣の場合に哺乳兒の生命を惜むならば、醫師も父兄も共に忍耐して、熱心に治療を施さなければならぬ、適當の時期に適當の治療を施さないと癒りが遲いばかりで無く、中耳炎などを起し、益々治療が複雜して來るからよく注意せねばならぬ。

哺乳兒の鼻腔がつまり、鼻呼吸が出來ぬからとて、それが總て急性鼻加答兒であるとは云へない、中には鼻腔内實扶垤利亞の爲めに鼻腔が閉塞して、鼻呼吸の障害を來すものもあれば、また鼻咽腔扁桃腺の病氣の爲めに、鼻呼吸の障害を起す場合もある、此等は何れも專門醫の力によつて鑑別することが必要である。哺乳兒の鼻つまりの場合に、母親が自分の口を小兒の鼻に附けて鼻汁を吸ふことは間々見受ける處であるが、若しそれが實扶垤利亞であつたならば、其母親は直ちに實扶垤利亞に罹る虞れがある、また鼻咽腔の病氣の場合には、鼻汁を吸つても決して何等の效を奏するものではない。小兒が鼻加答兒のため哺乳の出來ない時には母乳又は牛乳を匙でのませるのがよい。

種類

第二　慢性鼻炎

慢性鼻炎を大別して左の三種とする。

第一　慢性單純性鼻加答兒

第二　慢性肥厚性鼻炎、これは一口に肥厚性鼻炎と云うて居る。

第三　慢性萎縮性鼻炎

慢性單純性鼻炎

慢性單純性鼻炎にかゝると、鼻腔粘膜は充血して同時に腫れて來る、主として血液が滯り卽ち鬱血の狀態にあるものである鼻呼吸が障碍され兩側又は片方づゝつまる、殊に寢た時に下側になつた方がつまる其外天氣の模樣にてもつまる、分泌物も增して嗅覺も往々鈍くなる又鼻汁が咽頭の方に流れることもある。これは

原因

便祕する人にも起り、また度々急性鼻加答兒に罹り若くは急性鼻加答兒の治療を怠つた場合にも起る。其他常に頭を下方に下げて仕事をして居るもの又頭部に充血を起すやうな事を反復するものもまた本症を起すものである。冬期に炬燵にもぐつて居ることやまたは辛子、山葵、胡椒等の如き刺戟性の香料を好んで食べる人、神經性の人、運動不足の人、過度に淫事を玩ぶ人手淫をする人等にも起るものである。

治療上の注意

慢性單純性鼻炎は通常鼻呼吸障害を起すけれども、少しく運動するとか、或は精神を外のことに向けるとかすると、其爲めに鼻閉塞が消散するものである。慢性單純性鼻炎は甚だ多い病氣であるが然し藥液の塗布と適當なる攝生法によつて治癒するものである、決して手術を待つて初めて癒ると云ふものではない、手術は殆んど必要がない、然るに多くの人は鼻呼吸の具合が少し惡いと自分で肥厚性鼻炎或は鼻茸であると思ひ込んで醫師に手術を迫るがこれは大なる誤である、前にも話した如く鼻腔内の粘膜は我々の生活上極めて重要な任務を持つて居るものであつて啻に空氣を清潔にすると云ふことのみに止らず、特別なる解剖上の構造に依て空氣に濕氣と溫度を與へ、冷い空氣が直ちに氣管内に入らぬやうにする斯くの如き重要な任務を持つて居る、鼻腔粘膜を些細の原因の爲めに猥りに除ると云ふことは大に慎むべきことである、又必要を認めない、殊に特別に肥厚を呈して居らない鼻腔粘膜を切り取るときは、將來必ず惡結果を來すものである假りに總分肥厚して居る、卽ち肥厚性鼻炎の場合でも腫物とは全く意味の違つたものであるからして、さう輕々しく切除するわけには行かぬのである、況して慢性單純性鼻炎に於ては手術的療法は殆んど必要がない主として攝生に重きを措き原因をのぞき適度の運動を行ひ場合によつては轉地をする、局處に向つては藥物を用ひ專門醫の手にて治療を受け特別の場合には電氣燒灼等の方法を受くべきこともある。

療法

肥厚性鼻炎

慢性肥厚性鼻炎　素人は鼻呼吸に障害があると直ぐに肥厚性鼻炎であるとか、

或は鼻茸であるとか云ふ風に考へるけれども、實際に於ては肥厚性鼻炎なるものは素人の考へるほど、多くあるものではない。肥厚性鼻炎では鼻腔内の粘膜組織が健康のものに比較し、著しく増殖して、其厚さも二倍乃至三倍或は夫れ以上にも達して居る、時としては啻に粘膜組織のみならず、其深部にある骨の組織までも肥厚して居る場合もある。既に述べた如く鼻腔内には、上中下三つの突起卽ち甲介骨がある、此甲介は鼻腔の前方から後方に亘りて鼻腔内に突出し兩側鼻腔を仕切れる鼻中隔と相對して居るものである。此甲介は誰の鼻腔内にても生理的に存在して居るものであつて且つ生活上重要な意味を持つて居るものであるが、肥厚性鼻炎の際には、殊に此甲介の粘膜其中でも下甲介又は中甲介の前端或は後端に限局して組織の肥厚が起るものである。

肥厚性鼻炎に於ては、慢性單純性鼻炎の時と異なり、單に鬱血若しくは充血のみで無く、組織其物が増殖して居るのであつて、其肥厚が高度である場合には單

に藥液を以てこれを全治させる事は屢々困難である。斯の如き場合に肥厚性鼻炎の治療法として多くは鼻腔内手術によるのである。然し肥厚性鼻炎は總て鼻内手術殊に切除によられば治癒せぬ譯のものでない、輕度のものにありては手術によらずして全治するものである、鼻内手術は最後の手段であつて、肥厚性鼻炎を手術によらずして治す事が出來ればそれは理想的の療法である。

一般肥厚性鼻炎はどうして起るかと云ふに、急性鼻加答兒に罹つた際適當の治療を施さぬか或は屢々反復して急性鼻加答兒に罹るとか、或は刺戟性の瓦斯若しくは不純の空氣を絶えず吸入するとか、其他飲酒喫煙過度或は刺戟性飲食物の爲め、若くは副腔に蓄膿があつて其膿汁の刺戟によつて起るものである。心臟、腎臟、肝臟等に病氣があると慢性單純性鼻炎も起るが又肥厚性鼻炎も起る事がある また單純性慢性鼻加答兒を放任して置いたゝめに、組織の肥厚増殖を來して、遂に肥厚性鼻炎となるのもある。

自覺症狀

肥厚性鼻炎に罹ると、自覺症狀としては、第一に鼻呼吸が困難となる、其他鼻汁が多く出る又嗅覺減退する等の事があつて物の芳香風味が分らない、また屢々衄血が起り。其外頭痛、頭重の感がある、多くの人は此病氣のために、精神の散漫症狀を起し或る事物に注意力を集注することが出來なくなる同時に記憶力も惡くなつて來るので學生にありては學業の成蹟が惡くなり、一體に不活潑になつて物事に倦き易くなる。

此際鼻腔内を檢査すると、鼻腔粘膜殊に甲介の粘膜に肥厚を認める、尙ほ特殊の檢査法によつて、明かに肥厚せるや否やを鑑別することが出來る素人の内には鼻腔内を覗いてゐた際に、赤い色をしたものが鼻腔内に飛び出て居ると云ふのを以て直ちに肥厚性鼻炎であるとか或は鼻茸であるとか考ふる人は澤山にあるけれども、これは前にも話した通り生理的にある甲介であつて決して病的産物で無い故に、其甲介に特別の病的變化の無い以上は、決して病氣ではない從て手術的に

注意

切除する必要は毫もない。

學生などにあつては、外の原因の爲めに學業の成蹟が惡かつたり又他の病氣のために頭腦の明晰の度を缺き、或は記憶力が減退し又は神經衰弱症狀を起す場合でも悉く鼻の病氣のせいにする傾きがある。斯樣な場合に能く調査をして見ると實は鼻には少しも病氣が無くして或は自分の勉强不足の爲めに學業の成蹟が惡かつたり、または不攝生の爲めに神經衰弱症を起して居る樣なことが多い。だから等の症狀を呈せる場合には信賴すべき專門家の充分なる檢査を受け果して鼻腔内に病氣があるか否かを確めて貰ふことが必要である。

手術に就て

素人の中には、鼻腔内を切りさへすれば病氣が癒るかの如く考へて、醫師に手術を迫るものがあるが、肥厚性鼻炎があつても必ずしも切られば治らぬものではない、場合によりては、反つて切らないで、外の治療法を行つた方が奏效することがある。また假りに切除の必要あるにしても、其時期切除の方法、切除の要領

其他の點に充分の注意を拂はなければ後害あつて、何等益の無いことである。だから素人が徒らに鼻腔内の手術を希望するのは、甚だ間違つたことゝ云はればならぬ。

藥液塗布の注意

近來はまた鼻病患者自身が、鼻腔内に藥液を塗布することもあるやうであるが前にも述べた如く元來鼻腔内に藥液を塗布することは、鼻腔内の解剖上の關係を精知して居るもので無ければ、充分に塗布の目的を達することが出來ないものである。のみならず鼻腔内の患部を觀察し乍ら、藥液を塗布するにあらざれば、これまた塗布の目的を達することが出來ないものである。一體鼻腔内には藥液に觸れると反つて損ずる部分もある故、其等の處は、藥液塗布の際には避けなければならぬ。然るに若し素人が唯藥液を塗布さへすれば宜しいと云ふ考へで以て、無茶苦茶に自分で藥液を塗布する、第一鼻腔内の解剖上の關係も分らず、次にまた病氣のある場所を觀察することも出來なければ、また避くべき場所を避くることが

噴霧器使用の注意

出來ないと云ふ樣な關係で、十分の效果を得ることは決して出來ない、反つて惡い結果を來すことが多いものであるからして、鼻腔内に藥液を塗布することは、必ず專門醫にやつて貰ふことが必要である。

また近來鼻腔用噴霧器を用ゐて古加乙涅の如き毒藥を猥りに鼻腔内に吹き込む人があるが、古加乙涅はなか〳〵危險な藥物である。この藥を連用して居ると漸次藥になれて古加乙涅の效力が鈍くなつて、初めは薄い液で利いたのが、遂には非常に強い溶液でなければ、奏效しないやうになり、それが爲めに恐るべき古加乙涅中毒症を起して救ふべからざる狀態に陷る、だからして素人が古加乙涅に手にすると云ふことは頗る危險であつて大に警戒を要するものである。

若し職業の都合上または其他の關係上どうしても鼻腔用噴霧器を使用せればならぬ場合にあつては、專門家に就き、よく其使用法、使用の度數、それに用ゐる藥液の處方等を聞き其醫師より教はつた方法を堅く守つて決して其以外のことをせ

ぬことが必要である。

慢性萎縮性鼻炎　肥厚性鼻炎の反對に鼻腔内の粘膜並に骨の萎縮する病氣がある、これは慢性鼻炎の一種であつて慢性萎縮性鼻炎と稱へるものである。此慢性萎縮性鼻炎に三つの種類がある、即ち第一は單純性の萎縮性鼻炎、第三は惡臭性萎縮性鼻炎である。

單純性のものは、單に鼻腔内の粘膜並に骨が萎縮し、殊に甲介・萎縮して鼻腔が過度に廣くなつて來たものである。第二の依手術性のものは、鼻腔内の手術を餘りやり過ぎた結果によりて起る假令へば肥厚性炎の爲めに鼻腔内の粘膜または骨を餘り多く切り過ぎた爲めに起つたものであつて、これも矢張鼻腔内が過度に廣くなり漸次萎縮狀態に陷るものである。

斯くの如くに鼻腔が過度に廣濶になると、鼻腔を通過する空氣を與へることも出來なければ、また空氣に溫度を與へることが不充分になり爲めに鼻腔内は勿論

咽頭、喉頭に迄も乾燥症狀を起して鼻腔内の分泌液は固まつて痂皮となり、鼻腔壁に附着し或は鼻腔内を充たして爲めに鼻呼吸が妨げられる。其他頭が重くなつたり、記憶力が惡くなつたりするばかりで無く、咽頭や氣管、歐氏管、中耳等の病氣をも併發して來るものである。

若しも鼻腔内に出來た痂皮が一種極めて嫌ふべき惡臭を放つ場合には、これは第三種に屬する惡臭性萎縮性鼻炎である。此惡臭性萎縮性鼻炎は、また臭鼻症とも稱へられ鼻腔内の組織が萎縮して、鼻腔が廣濶になり、爲めに鼻腔内分泌物が固まつて痂皮を形成し爲めに鼻腔閉塞を起し又歐氏管中耳等の疾患を起す事がある許りでなく、其痂皮が一種忌ふべき惡臭を放つものである、故に一朝此臭鼻症に罹つた人は他人より嫌はれ其人より遠ざかる樣になり從て交際社會に出て他人と談笑することも出來なくなる、又學生などは學校に行つても、甚しく惡臭を放つ爲めに衆人と同席することが出來なくなり、隅の方に小さくなつて居ると云ふ

やうな境遇に陷り　精神上に大なる打撃を蒙り、非常に悲觀するやうになる。また婦人にありては其爲めに强度の「ヒステリー」に懼る場合もある。殊に都合の悪いことには患者自身には既に嗅覺が侵されて居るから自分の鼻がそんなに甚しい悪臭を放つと思はない唯周圍の人に丈け悪臭が分ることである。

年齢の關係

臭鼻症は、十五歳乃歳二十二三歳の所謂青春期に多く殊に婦人に多いものである故に結婚に就ては非常なる障碍となる、從て臭鼻症は患者の一身上に重大なる影響を及ぼすものである。

療法

慢性萎縮性鼻炎の治療法は專門醫に於ても、甚だ困難とする處であつて、醫師も患者も共に非常なる忍耐力を持つて行はれば効果の顯はれぬものである、臭鼻症に於ては其人の生存上に大なる影響があるもの故病氣其ものゝ全治は兎も角少くとも其悪臭を除く事を謀るのが必要である。

臭鼻症の悪臭は鼻腔内に出來た痂皮が放つのであるから、痂皮を除けば、つまり其悪臭は無くなるものである、故に取敢へず痂皮を除く方法を講ずることが必要である。尤も簡單なる方法は鼻腔内を洗滌するのがよい、それには鼻腔洗滌用の噴霧器を備へて、百倍の食鹽水または百倍の過酸化水素水を以て鼻腔内を洗ふが良い、然るときには、痂皮はだん〳〵鼻腔の壁から離れて、鼻汁をかむ際に出て來るものである、從て鼻呼吸障害も癒り、また悪臭も放たなくなる。併し鼻腔の奥の方に痂皮が固く附着して居る場合には、洗つた丈けでは除去ないことがあるから、さう云ふときには醫師の許で取つて貰ふことが必要である。洗滌の際注意すべきは洗滌水が澤山鼻腔内にある時に强く鼻汁をかむと汚れた水が歐氏管から中耳の方に進入し中耳炎を起す虞れがあるから靜かにかむのがよい、水が盡く出てから强くかむ樣にする、又洗滌丈けでは病氣は全治せぬものであるから治癒させるには種々の治療法を講じなければならぬ。

小兒の遊戯中往々、豆または小石の如きものを鼻腔内に入れそれが取れなくなることがある。また大人でも食物を嘔吐した際に鼻腔内に異物が入ることもある異物が鼻腔内に長い間停滯して居ると遂には腐敗して膿汁を作り、そして悪臭を放つやうになる又鼻腔内が腫れて痛んで來ることがある、故に小兒の遊戯中には注意して鼻腔内に何も入れない樣に監視することが必要である。

若し四五歳の小兒の片方の鼻から膿汁の如き鼻汁が出て、そして大變に臭い場合には、鼻腔内の異物に疑を措くが宜しい。また明かに小兒が鼻の腔に、豆小石等を入れたと云ふことが分つて居る場合には、成るべく早く専門醫に依頼して取つて貰ふがよい素人が手をつけるのは宜しくない。

第四　衄血

衄血の原因は種々あつて、或は鼻を打つて卽ち外傷によつて起ることもあり、また鼻腔内に損傷を起して出血することもある、假へば指頭又は爪で引掻くとか

剃刀で傷が出來たとか云ふ場合に起ることがある。其他心臟、腎臟、肝臟などに病氣のある人は、血壓亢進の結果衄血を起すこともわれば、また動脈硬變の爲めに起ることもある。また出血し易い素質のある人は突然衄血を起すことがある。婦人などでは月經のときに、代償性に月經の代りに衄血が起り、其外痔疾患者にも矢張代償性に、痔核から出血する代りに鼻腔から出血することもあるものである。故に婦人は月經中は怪我などをせぬ樣に注意する事が必要である、鼻腔に少し傷が出來ても大量の出血を起すものである、醫師が婦人の月經中に手術をせぬのは背高度の出血を恐れるからである。

衄血は少量の場合には、さして危險なことも無いが、大量の場合、若しくは出血の量が少くとも一日數回出血して、それが長時日續く場合には遂には高度の貧血を起して生命に危險を及ぼすに至るものである。

衄血の時には、屢々頭重、眩暈、耳鳴り、上衝等の前驅症狀があることがあ

出血する場所は多くは鼻中隔即ち鼻の障子の前端であつて、鼻腔の入口部からさして奥でない處から出血するものである。

若し鼻から出血した場合には、暫くの間手指で鼻翼を鼻中隔に壓し附けて置くと輕度の場合には通常それで止血するものである。紙や綿などを詰めるよりも、此法が簡單で且つ容易に止血するものである。併し多量の場合には、唯鼻翼を手指で壓しつけたゞけでは不充分であるから、さう云ふ場合には氷嚢で頭部を冷し又氷枕を用ゐ其外鼻柱の上に氷嚢をあてる。それでも止血せぬ場合には、速かに專門家を招いて止めて貰はねばならぬ。若し出血を餘り長く放任して置くと、全然貧血に陷り血液が薄くなり凝血作用が鈍くなり、爲めになか〳〵止血しないやうになり遂には生命にも危險を及ぼすことになるから、さう重態にならぬ前に專門醫の許に行き早く手當を受け止血して貰ふことが必要である。

睡眠中に鼻から出血して、それが咽頭から喉頭の方に下り、翌朝痰をした際に血の混つた痰が出てその爲めに驚くことがあるのみならず神經質の人は肺結核であるかと思うて心配することがある、またときとしては腦溢血の代りに代償的に衄血を起す場合もあるが、かう云ふ際には反つて其出血を急に止めない方が宜しい、是等の判斷は總て醫師の考によるべきものである。

第五　鼻　茸

鼻呼吸が障害されると、素人は直ちに鼻茸が出來たと考へふけれども、鼻茸はさう世間で考へるほど多いものではない殊に近頃は以前に較べて、鼻茸の患者は甚だ尠くなつた。

鼻茸と云ふのは、鼻腔の中に球狀の腫物が出來るのであつて、肥厚性鼻炎とは全く異なる鼻茸の色は通常灰色で半透明なものである、普通は赤い色をして居らぬものである。鼻腔内を視いて、赤く腫れ出して居るものを認め、直ぐに鼻茸と思ふは誤りである、鼻茸が出來ると鼻呼吸に障害を來し鼻汁過多となり又嗅覺異

嗅覺減退等を起し、其他頭痛頭重記憶力減退等があり、また聲も鼻聲となるものである。其外咽頭、喉頭の病氣をも起すことが多い、慢性單純性鼻加答兒または肥厚性鼻炎の際には、鼻呼吸障害は、時によつて輕くなつたり、或は左右代り〴〵に閉塞を起すことなどあるが、鼻茸に於ては殆んど始終鼻腔が塞つて居るものである。

鼻茸の治療法は、手術的に鼻茸を取り除くのであつて藥液では全治はせぬものである然し其手術の方法が悪いと再發するものである。以前は手術の方法が餘り發達して居らなかつた爲めに、大抵の鼻茸は二度も三度も再發したものであつたが、近來は一度手術を行へば滅多に再發しないものである。鼻茸の出來て居る時は屢々次に述べる上顎竇の蓄膿症其外前額竇又は篩骨蜂窠の蓄膿症が同時にあるものであるから精しく檢査する事が必要である。

第六　鼻腔内悪性腫瘍

若し鼻梁の部分が段々に腫れて來て、鼻の形狀が漸次變つて來ると同時に鼻腔がつまり鼻汁が多くなり時々出血するとか或は皮膚に何等大した變化なくも目の下の骨が大變に腫れて來る、且つ大した疼痛が無い場合には、十中の八九は[illegible]殊に性質の餘り良くない腫瘍卽ち癌とか肉腫とか云ふものであるから、かう云ふ時にはたとへ疼痛が無くとも決して等閑に附して置かずに、成るべく早く醫治を受くることが必要である時機が後れると治療に困難するものである、悪性腫瘍があつても餘り進行しない間に手術を受くるときは治癒するものであるから、成るべく早く醫師の診察を受くることが必要である。

第七　鼻の黴毒

若し前述べたる場合と同樣に、鼻梁が段々に腫れ同時に其部分の皮膚が多少赤く色着き時々輕き痛みを感ずる如き場合、屢々鼻の黴毒のことがある。殊に血性の鼻汁が出て、又は非常に臭い膿汁が鼻腔の中から出て來る場合、殊に其人が嘗

て花柳病に罹つたことがあるならば、それは鼻の第三期黴毒である。

これを放置すれば、所謂鼻が落るのである。鼻骨が腐れて、だん〳〵鼻柱が落ち遂には非常に醜い形狀の鼻になるものである。だからして、若し鼻梁に腫れが來て其部分の皮膚が少しでも赤くなつた場合には直ちに專門醫の診察を受け、黴毒であるや否やを調べて貰ふことが必要である。若し適當の時に黴毒の治療を受くれば鼻の落る虞れは無いものである。

時としてはまた小さい子供に、鼻黴毒が起り鼻が落ちることもある、それは兩親の黴毒を遺傳した結果であつて、卽ち遺傳黴毒の爲めである。

鼻の形狀が醜くなつた場合には、整形術によつて其形狀を矯正することが出來る之を鼻貌整形術と云ふ整形術には二つの種類がある、卽ち一は外科的の整形術であつて、もう一つは注射法によつて整形するのである。此二種類の方法は各特長があつて其醜形によつて或は外科的整形術の適當な場合もあれば、或はまた注

射法の適する場合もあり又時として兩方を用ゐて整形する場合もある。

鼻翼が缺損して居たり鼻の障子卽ち鼻中隔が缺損若くは屈曲或は兩側の鼻翼の形が大小不同であつたり又は鼻孔が塞がり又は小さ過ぎる樣の時は外科的整形術を行ふ、鼻梁が陷沒したり甚しく低鼻であつたり又は梁が弓狀に凹陷して居る如き時は注射法による何れも手術は至極簡單であるが然し充分熟練と經驗とがなければ滿足の結果を得ないものである。

注射法による整形術は、西曆一千九百年に維納のゲルスニー氏が始めて行つたもので、注射に用ゐた藥物は「パラフィン」であるが、其當時は注射の方法並に藥物の選擇が不完全であつた。其後西曆一千九百〇五年に至つてスタイン氏によつて改良せられ、夫れ以來此方法は大なる發達をした、我が國に於ては更に此方法が改良せられ器械等も寺田學士及び自身等によつて改良せられ幾多の研究の結果好成蹟を得明治四十一年頃に至り漸次注射の方法及び注射用器械も一定したのであ

る、此方法の大體を話すと先づ注射に用ゐる固形「パラフヰン」と云ふのは一種の鑛物であつて、それが完全に消毒されて居る場合には人體内に入つても、何等の害を及ぼさぬことは既に幾多の學者によつて證明せられて居る。此物質を或る方法によつて、鼻梁其他の部分に注射し、陷没して居る處或は低い處を矯正するのであつて、此方法はよく適應症を選び正規の術式により、周到の注意を拂つて行はれた場合且つ一方には患者が醫師の命ずる攝生法を堅く守つた場合には、決して危險もなく又不結果に終るものではない。此方法は極めて簡單であつて、通常一回若しくは二回の注射にて充分其目的を達することが出來るのである、即ち僅々二三分間の手術によりて目的を達するものである。注射の時には痛みは殆どないのであるから麻醉等を行ふ必要もない、然し此方法は適應症を良く選ぶと云ふことが必要であつて、どんな醜鼻でも此注射によつて醜形が矯ると云ふものではないまた斯くの如き手術には充分の經驗と熟練を要するものであるからして、かう云

隆鼻術に對する世人の誤解

ふ手術を受けやうと思ふ場合には豫め信頼すべき醫師を選び精査を請ふと云ふことが必要である。

近頃此注射法によつて、反つて鼻の醜形を招いたと云ふ事を屢々聞くが、此等は勿論技術の不熟練な結果にも關係するが、併しまた患者自身の攝生法の宜しからざることにも據ることゝ思ふ。

從て一概に「パラフヰン」注射の整形術は結果が悪いとは云へないので、此注射法によつて醜い鼻の矯正されて居る人は、隨分世間に多い、自分が嘗て矯正した人で三四年經て遇つた際少しも氣がつかず又注射した事をも想ひ出さぬ事が屢々ある、皮膚に何等の傷痕を殘さぬから、技術が巧みに行はれた場合には少しも他人に判らないものである。併し此手術は、元來鼻形の醜き人に行ふ手術であつて、通の形狀を持つて居る人には、進んで行ふ要はないものである。

萬一注射法によつて矯正した鼻形が外傷又は不攝生等の原因に依て形の變つた

場合には簡單なる方法によつて更に之を矯正する事が出來る卽ち先きに注射した藥品を拔き取り再び注射法を行ふことも出來るのである故に若し注射後醜形を來した場合には速かに摘出して貰ふがよい。

第八　鼻腔內結核

指頭又は指爪其他剃刀等によりて鼻腔內に結核が傳染し玆に結核性潰瘍を作る事がある結核性潰瘍は通常餘り痛みはないが放置して置くと漸次周圍に擴がり粘膜も軟骨も破壞され遂には鼻中隔に大きな孔が穿く樣になる。

結核性潰瘍が出來ると初めは鼻腔より血性を帶びた分泌物出で夫れが痂皮となつて固まるために鼻腔が閉塞する、病氣の進行と共に周圍の組織が益々破壞される、結核性潰瘍は初期に於ては手術其他の療法により全治するものであるが餘り進行したものは治癒が困難である、指頭指爪等によりて黴毒淋病等も鼻腔內に傳染するものであるから平素猥りに指頭を以て鼻內をいぢる事は愼まねばならぬ。

又指頭指爪等は常に淸潔にして置く事が必要である。

第十章　副鼻腔の疾患

第一　急性上顎竇炎

前にも述べた如く上顎竇と云ふのは上顎骨の骨腔卽ち眼の下部で鼻翼の橫の所に當る所に存在する菱形の空洞を云ふので此空洞の大きさは人々によつて異るが普通鷄卵大以上である其壁は粘膜を以て被はれ二三の小さい孔に依て鼻腔と交通して居る、健康時には此空洞內は空氣を以て充されて居るが疾病に罹ると此中に粘液又は膿汁が滯溜し或は空洞內が腫瘍を以て滿される事もある。

急性上顎竇炎は卽ち此空洞內粘膜の急性炎症であつて鼻感冒の時に同時にか又は繼發して起る、其外「インフルエンザ」、肺炎、麻疹、猩紅熱等の時にも起り上顎竇內に粘液性又は血漿性若くは膿性の分泌物が滯るのである。

症候

此病氣に罹ると輕症の際には頰部に緊張又は壓迫を感ずる位に止まるが症狀が重い場合には隨分劇烈な痛みを感じ前頭部に迄も痛くひゞき又高度の頭痛を起し時としては齒痛を伴ふ事もある、又鼻腔の粘膜が腫れて其爲めに鼻呼吸が困難となり嗅覺も侵される、普通は頰部には何等變化を認めぬものであるが時としては頰部が多少腫れる事もある、鼻腔からは膿性分泌物が多量に出で、ために鼻の入口部が糜れて赤くなることもある又體溫も上り身體が非常に倦くなる。

療法

急性上顎竇炎は適當の治療に依れば二三週間で治るのが普通であるが黴菌の種類又は體質によりては慢性症に移行するものである。

此疾患の治療は勿論專門醫に依賴すべきものであるが應急所置としては頰部と頭部に氷囊をあて、靜かに臥て居るがよいそして喫煙、飲酒入浴は見合すのである。

第二　慢性上顎竇炎（上顎竇蓄膿症）

慢性上顎竇蓄膿症も矢張り感冒のために起り又インフルエンザ麻疹猩紅熱其他

原因

熱性傳染性疾患のためにも起る事は急性の場合と同樣であるが尙結核、黴毒等のために其他急性上顎竇炎に對し適當の治療を施さゞる場合にも慢性症となる、其他上顎の齲齒が原因となつて此病氣が起る事もある。

症候

慢性上顎竇蓄膿症に罹ると鼻腔から膿樣の青色又は黃綠色の鼻汁が多量に出で且つ多くの惡臭を放つものである、此病氣は大した疼痛もなく又發熱する事もないので永年此病氣に罹つて居ながら自分で少しも氣がつかずに過す事が往々ある醫師が試驗法によつて膿汁を出して見せると始めて驚く樣な事もある、爲病氣の者は輕度の頭痛を起し其外頭が重かつたり肩がはる樣な事もある、最も著しい事は高度の健忘症に陷る事である、其外此病氣にかゝると甚しく食慾を害せらるゝ、夫れは一つには嗅覺が高度に侵されるために物の香臭が判らなくなり、從て食物の芳香も感じなくなると、一つには膿性鼻汁を嚥下するために胃腑の粘膜が侵され慢性胃病を起すためである。

治療法は種々あるけれ共要するに單に藥液を塗布する丈けでは到底全治せぬ病氣で多くは特殊の手術を受ればならぬ、尤も手術にも色々種類があつて鼻腔から行ふのもあれば又頰部卽上唇の裏からやる方法もある。後者は上顎竇蓄膿症の根治手術と云ふのである。此根治手術にも色々違つた方法があるが兎に角熟練な醫師に根治手術を受け手術後の攝生法が宜しければ全治して再發しないものである。世間には上顎竇蓄膿症は手術を受ても再發するから寧ろ初めから手術を受けぬ方がましであるなどゝ稱ふる人があるが夫は大なる誤りである、手術をせずに何時迄も放置して置けば膿汁の性質も惡くなり記憶力は益々惡くなり又常に中耳炎膿毒症腦膜炎等の危險なる餘病を起す怖れがある。手術後の結果は一は手術の巧拙にもよるが又患者の體質、病原の種類並に患者自身の攝生法による、手術をしたからいゝと思ひ攝生法を守らなければ何の病氣でも再發するものである、手術後の主なる攝生法としては鼻感冒にかゝらぬ樣に注意する事、飲酒喫煙は鼻感冒等の疾患を起す誘因となり易き故之を禁止若くは節する事、常に適度の運動をなし身體强壯法を講じ鼻腔内には猥りに藥液等を使用し又は洗滌等を行はざる事、總て醫師の命を守り攝生に注意する事等である。

第三　急性並に慢性前額竇炎

原因　之は前額部殊に兩側の眉頭の部分にある骨空洞内の疾患であつて原因は上顎竇炎の場合と同じ、其外往々外傷のために黴菌が侵入して化膿を起す事もある。

症狀　急性症に於ては强度の前額痛、頭痛を起し眉毛の部分を壓すと疼痛を感じ往々神經痛と酷似する事がある其外羞明、流涙を起し又嗅覺減退を起す、又鼻腔からは膿性鼻汁が出る。

療法　斯かる急性の時機には普通手術は行はない、應急處置としては飲酒入浴を禁じ前額部に氷嚢をあてる鼻腔内其他の處置は須らく專門醫に依賴するが宜しい。

慢性症となると膿性鼻汁の排出も多量となり頑固の頭痛を起し鼻汁も臭氣を帶

び又嗅覺も侵されて來る。

治療法としては洗滌法手術法等あるが何れも熟練した技術を要するが故に經驗に富める專門醫に一任するがよい。

副鼻腔の疾患としては此以外に篩骨蜂窩及蝴蝶骨竇の蓄膿症がある之等の症狀は上述の疾患の症候と大同小異であるが其診斷療法等は總て專門家の精診を待つて決するものである。

第十一章　鼻咽腔の疾患

第一　鼻咽腔加答兒

鼻咽腔とは、鼻腔から咽頭に移り行く處を云ふのであつて、此部分の粘膜に加答兒を起す場合には、鼻咽腔加答兒と云ふのである。鼻咽腔加答兒には急性及び慢性の二種類あつて急性のものは多くは急性鼻加答兒に伴つて起る此場合に鼻腔

の奥の方が乾燥して灼熱の感があり、又は其處に分泌物が澤山たまり不愉快である其他頭痛耳鳴等を訴ふることもある。

さう云ふ場合には、此部分に藥液を塗布することが必要である、けれども此處は含嗽の屆かぬ場所であり、また自分一人で藥液を塗附することは中々出來ぬ場所であるからして、專門家に就て治療して貰ふことが必要である。

急性症の場合に、これを放任して置くときに屢々慢性鼻咽腔加答兒となるものである。慢性症は、矢張鼻腔の奥に鼻汁が溜まつてそれが咽頭の方に流れ又は固まつて痂皮となることがある其外分泌物が鼻腔の奥に溜るために鼻呼吸が妨げらるゝこともあり、また歐氏管の口が塞がることもあつて、其爲めに歐氏管加答兒或は中耳炎を起すこともある。だからして鼻咽腔加答兒を起したと思うたならば早く專門家の治療を受くることが必要である。

これはまた鼻咽腔扁桃腺肥大症とも云ふものである、この病氣は主もに少年並に青年に來る病氣であつて學齢兒童には殊に多い病氣であるが大人には餘り屢々起らないものである。先きにも話した通り、鼻腔と咽頭との間に半球形に梅干の如き外觀を持つて居る組織が出來るのであつて、組織其物は口蓋扁桃腺と同じ組織を持つて居る此組織は幼年者には生理的に存在して居るのであるが、段々大人になるに從つて、それが自然に萎縮して行くのである。併し幼年者に於ても此組織が過度に發育した場合、若しくは屢々炎症にかゝり、其爲めに增殖肥大した場合には鼻腔の後方を塞いで其爲めに種々の障害を來すものである。

本症に罹ると第一には鼻呼吸が妨げられ、其爲めに已むを得ず口腔で呼吸する樣になる從て睡眠が不安となり、屢々夢を見る、また鼾聲をかいたりする、それから睡眠不足によつて心身の恢復が十分出來ぬ故に心身の倦怠を起す。哺乳兒にあつては、鼻呼吸障害の爲めに呼吸困難を來し、尙ほ哺乳することが出來ない其

結果營養不充分となり、大に衰弱するものである。重要な事は此腺樣增殖症があると精神散漫症を起す事であつて、卽ち或る一つのことに注意力を集めることが出來ぬ樣になる、其爲めにまた學生にあつては學校の成績が悪くなる、殊に數學が不得手になる。其他絕えず口腔で呼吸して居る爲に、顏貌が變り齒の並びが悪くなり、そして八重齒が出來る。又胸廓も扁平となり、身體が虛弱になり、肺結核等にかゝりやすくなる其他歐氏管が增殖せる扁桃腺の爲めに塞がれて歐氏管加答兒または歐氏管閉塞を起し、其爲めに聽力が甚しく障害される。また時として中耳炎を起す場合もある。其他聲が鼻腔に拔けぬ爲めに、聲に響きがなくなり時としては吃る事もあり、また言語が不明瞭となることもある其外反射的に喘息發作、癲癇發作を來し、または遺尿症を起すこともある。

此病の治療法は、手術によつて切除するのであるが。其力法は極めて簡單である口腔の中から器械を入れて僅か一秒か二秒の間に取つて了ふことが出來る、故

に哺乳兒にも此手術を行ふことが出來るのである。此病氣は長く放任して置けば置く程、其子供の頭腦は惡くなり、心身の發育が障害されるものであるから成るべく早く取り去ることが必要である。これを取り去つた爲めに、身體が强壯になり精神も活潑になり、聽力も恢復すると云ふことは非常に多いものである。

此病氣は肥厚性鼻炎よりも、また鼻茸よりも遙に多い病氣であつて、殊に學齡兒童、卽ち心身發育の時期にある兒童に多いものであるから、父兄は能く注意して自分の子供等にさう云ふ病氣の徵候があるか無きかを檢し、若しあつたならば速かに專門家に就て取つて貰ふことが必要である。

第三　鼻咽腔の腫瘍

鼻咽腔には又種々の腫瘍が出來る卽ち鼻咽腔纖維腫內皮細胞腫、肉腫、癌腫等が出來る斯樣な腫物が出來た時は鼻呼吸障害、歐氏管閉塞、聽力障害、出血等の症狀を起して來る、故に以上の症狀を感じたならば速かに專門醫の診斷を受け治療を請ふが宜しい。

第四　鼻咽腔の黴毒

鼻咽腔には黴毒性の潰瘍が出來る事がある多くは第三期黴毒の潰瘍が出來るのであつて此潰瘍が出來ると鼻咽腔內に汚ない膿の塊が附着し口腔內が甚しく不潔になる然し痛みは割合に輕微である、治療法は早速充分の黴毒驅除法を行ふのである。

下編　咽頭及び喉頭の衞生と其疾患

第十二章　咽頭及び喉頭の解剖的關係

咽頭は口腔の奥を云ふので上中下の三部に分れて居る先きに話した鼻咽腔は卽ち上部咽頭の事であつて其下の部分卽ち口腔の突當りの部は中咽頭である夫れより下は下咽頭(或は下咽腔)である。

中咽頭には兩側に恰も梅干の核の樣な外觀を有する半球狀のものが見える之は卽ち咽頭の扁桃腺である此扁桃腺は生理的に存在するもので幼年者には殊に著明に認める事が出來る漸々年を取り大人になるに從つて漸次組織が萎縮するものである、故に咽頭に扁桃腺があつたからとて之を以て直ちに病氣と云ふ譯には行かぬ扁桃腺は腫瘍とは違ふのであるから何等障害を起さない場合又は病的變化を呈して居らぬ時には手術的に除く樣な事をせんでも宜しい。

下咽腔には二つの管が前後に並んで開いて居る其前にある方は喉頭の入口であつて喉頭から氣管氣管枝に連續し肺臟に終つて居る、後ろにある管は食道であつてこれは胃腸腸管に連續し肛門に終つて居る喉頭は特に丈夫な軟骨で圍まれ其內部には左右の聲帶がある此聲帶が巧妙に運動し同時に肺臟から來る空氣によりて振動し種々の音聲を發するのである此聲帶が腫れるとか又は運動に故障が起ると直ちに音聲に影響を來す。

咽頭、食道、並に喉頭氣管は何れも特種の粘膜を以て掩はれて居る。

第十三章　咽頭及び喉頭の生理的機能

咽頭は食物の攝取、嚥下及び呼吸、言語構成に密接な關係がある故に此部分に病的變化が起ると食物嚥下障害を起し言語も不明瞭となり甚しき時は呼吸障碍を起すものである。

食道は食物を胃腑に送る管であるが其壁は軟かい組織で出來て居る故に角ばつた硬い物例へば義齒の如きもの又は針、小楊子、魚骨の如きものは容易に食道壁に刺り中途に閊へ又は食道壁を破り化膿等を起す惧れがある。

喉頭は生理上二樣の機能を持て居る卽ち發音機能と呼吸機能である發音は聲帶に依て起る此聲帶のある部分は又一方には呼吸道であるから聲帶或は其附近に病的變化が起ると音に聲音に故障が起る許りでなく呼吸にも障碍を來し其他咳嗽が起り又痰が出る樣になる。

第十四章　衞生上の注意

咽頭は絶えず食物又は空氣に觸れる處であるから病氣に惱る機會も甚だ多い從て平生飲食呼吸等の際に注意を要する殊に鼻の病氣鼻咽腔の病氣は咽頭の病氣を惹起す原因となる故夫等の部分に病氣があつたら速に治療を加へるがよい其外あまり熱き物辛き物又はあまり硬い物は咽頭食道の粘膜に病氣を起し又は粘膜を傷つける恐がある、其他家庭に於て注意すべき事は玩具、貨幣などを猥りに口腔に入れる事で小兒が貨幣を嚥み込んで食道につかへる事は甚だ多い、又大人では食後楊子をいつまでも啣へて居る人があるがこれも危險である突然咳が出る樣な時に楊子を氣管内に吸込むことがある、殊に楊子を啣へながら書騷などをするのは最も危險であつて其爲に楊子が食道壁に刺り大出血をした人などもある、刺戟性の瓦斯塵埃多き空氣を吸入し又は喫煙過度飲酒過度發聲過度により咽頭の粘膜、喉頭、氣管の粘膜に病氣を起す惧がある、喉頭氣管の病氣には吸入に依て治療する事があるから吸入器を家庭に備へて置く事は衞生上望ましき事である。

第十五章　咽頭の疾患

第一　急性咽頭の疾患

原因

症候

處置

急性咽頭加答兒は、急性鼻加答兒に引續いて起るが、また單獨に起ることもある刺戟性の瓦斯を吸入したり、塵埃の多き空氣の中で働いて居つたり、或はまた餘りに乾燥して居る空氣、または寒冷なる空氣等を吸ふ場合に起るものである。

注意すべきは口腔から呼吸すると容易に咽頭カタルに罹る事で從て鼻閉塞は間接に咽頭カタルの原因となるのである。

急性咽頭加答兒に罹ると通常唾液をしみ込む際に咽頭が痛み咽頭が乾き、時としては刺すやうな痛みを感ずることもあろ、また非常に灼熱を感ずることもあるがさう云ふ際に咽頭の粘膜を見ると非常に赤くなつて腫れて居るものである。そして粘つた唾液が澤山に出る、時としては耳鳴があつたり、また耳の方に放散する疼痛を感ずることもある。

かう云ふ症狀を呈せる場合には、刺戟性の飲食物（辛、胡椒、鹽漬等）「アルコール」性飲料、煙草等を禁ずる必要がある。談話もなるべく控へるがよい飲食物

は軟かい冷いものがよい「アイスクリーム」なども宜しい薄い食鹽水に氷を入れたもので含嗽するのも宜しい、其の他二百倍位の明礬水で含嗽を行ふ、病氣が輕い場合にはそれだけで癒るものである。若し病勢の進むだ場合又劇しい時には、醫師に藥を塗つて貰ふことが必要である。素人が勝手に硝酸銀水などを塗るは却て病勢を進める惧があるから危險である。

第二　慢性咽頭加答兒

慢性咽頭加答兒は、中年の男子に多い病氣であるが婦人にも屢々起るものである、此病氣は鼻腔に病氣があつて鼻呼吸障害を起し其爲めに口腔から呼吸する人が罹り易く其外工場銀行會社等の極めて塵埃の多い處に終日働いて居る人にも起り易いものである又喫煙過多飲酒過多の人、または音聲を過度に用ゐる人に起る殊に俳優講談師等は罹り易い、或はまた上顎竇等に蓄膿症があるときには其膿汁が咽頭の粘膜に觸れて慢性咽頭加答兒を起すものである。又心臟腎臟肺臟に病氣

のある人にも起る。

慢性咽頭加答兒に罹ると、咽頭の乾燥感、または異物のあるが如き感じを起しまたは瘙痒感を訴へる事もある。其他粘液が咽頭の奥に停滯し甚しく不快を感ずる事もある又之を烈しく喀出する際に痰の中に血液が交り大に神經を惱ます事もある其他耳痛、耳鳴、歐氏管狹窄等を起す事もある、局所の病的變化は專門醫でないと充分に分らない。

慢性咽頭加答兒の療法としては先づ其原因を除くことが大切であるが然し時としては原因を全然除く事が出來ない爲めに、なか〳〵急性症の場合のやうに、早くは癒らぬことがあるから餘程忍耐し治療を受ける必要がある、原因によりては鼻内の手術或は扁桃腺又は咽頭の手術をする必要もある、併し一般には藥液を塗布し、含嗽藥を用ゐ、又内服藥を服むものである。

第三　急性扁桃腺炎

此病氣は、急性咽頭加答兒と同じ原因によりて起り咽頭の兩側にある扁桃腺が主として犯されるのであつて時として一家族の内に多數の同病患者が出來る事がある此病氣にかゝると扁桃腺は腫脹して甚しく赤くなり急性扁桃腺炎で場合によりては扁桃腺の表面に處々に黄白色の斑點が現れて來る、輕卒に見ると丸で扁桃腺の實扶垤里亞の樣に思はれる、是は卽ち腺窩性扁桃腺炎と云ふものである、腫脹劇しき場合には、言語に障害を起して不明となり、幼年者にありてはときとして呼吸困難を起すこともある。

又割合に高い熱を發するものであつて、殊に幼年者にあつては、惡寒戰慄を起し、其他身體の關節が痛み、また耳も痛むことがある、屢々尿の中に蛋白を見ることがある。其他頭痛を起すことがある、最も苦痛に感ずるのは劇烈なる嚥下痛である、殊に腺窩性扁桃腺炎は、高い熱を發するものであつて、同時に全身症狀が劇しく關節痛も高度に起つて來る、此病氣で三十九度四十度以上の高熱を發す

處置

ることは決して稀らしくない。

此扁桃腺炎の應急處置としては先づ安靜に平臥し刺戟性の飲食物を避け、冷たい軟かい食物を攝り頸部には氷嚢をあて、冷すが宜しい。

注意

此病氣は往々實扶埜里亞によく似て居つて、素人にはそれを鑑別することが六づかしいから、成るべく早く專門家の診察を受け、若し實扶埜里亞であつたならば、早く其の實扶埜里亞に對する治療を受けることが必要である。

常習性扁桃腺炎

人によつては、毎月一回若しくは二回と定つて急性扁桃腺炎を起す人がある、これは常習性扁桃腺炎と云つて、ツマリ扁桃腺炎を起す癖のある人であるが、斯樣な人にあつては、扁桃腺炎の起つて居らない時に、手術的に扁桃腺を除去して了ふ方が宜しい。

第四　扁桃腺肥大症（慢性增殖性扁桃腺炎）

扁桃腺肥大症は幼年者に殊に多く見る病氣であつて體質によりて生れつき扁桃腺組織の增殖して居る者もある又一家族全體が皆扁桃腺肥大症に罹つて居る事もある、其外度々扁桃腺炎に罹ると遂には肥大して來る、大人にも扁桃腺肥大症がある、扁桃腺が過度に發育し又は炎症に依て肥大すると其爲めに咽頭が非常に狹くなり食物を攝るとき又は呼吸の際、或はまた言語を發する場合に障害を來すものである。また扁桃腺肥大の爲めに反射性に咳嗽が出る、其外聽力に障害を來すとか睡眠時に鼾聲をかくとか、或は睡眠不安を來すものである、扁桃腺内に一種臭氣あるものが蓄積し其爲めに口がくさくなる事もある。

症候

扁桃腺は生理的に人體に存在せる組織であつて惡性腫瘍の如きものとは全く異なるが故に幼年者の咽頭に此組織が見えたとて決して驚き騷ぐには當らない夫れが肥大して種々の症狀を起した時に初めて治療を要するのである。

注意

扁桃腺肥大症の治療は種々あるが近來は特別の場合の時は手術的に行ふ、現今行はれる手術に二通ある、其一つは扁桃腺の一部分を切除し、一つは其全部を剔出

療法

するのであるが手術は何れも至極簡單なものである。又其手術は三四歳の幼年者にも行ふことが出來るものであつて、學齡兒童などにあつては無論容易に此手術を行ふことが出來るものである。また幼年の間に肥大して居る扁桃腺を切除する方は大人になつて切除するよりも容易であつて、出血も尠く、創傷の癒るのも早いものであるからして、扁桃腺肥大のある小兒は、猶豫することなく速に切除して貰ふのは、其兒童の健康の爲めに必要なことである。併し先きに云つた通り何等障害を及ぼさない生理的の扁桃腺は、決して強ひて手術するの必要は無いのである。大人に於ける扁桃腺肥大症は單に一部分切除するよりも全部剔出した方がよろしい幼年者に於ても剔出の要を見る事もあるが普通は切除丈けで充分のものである。

第五　扁桃腺周圍膿瘍

これは口蓋扁桃腺の周圍に膿が溜まつて、其部分が非常に腫れ疼痛も烈しく其爲めに口は開かなくなり、飲食は出來ず、唾液の分泌も增して來る、此病氣は通常一側に起り其部分の軟口蓋から扁桃腺にかけて非常に腫れて來る、そして發熱もあり非常に苦痛を感ずる病氣である。

原因

かう云ふ場合には、速に專門家の許に行き、適當の時期に切開を受け、處置をして貰ふがよい。

第六　咽頭後壁膿瘍

症候

これは咽頭の突き當りの部分に膿汁の溜まる病氣であつて、其部分の淋巴腺が化膿して膿瘍を起すのである。

此病氣は主として幼年者殊に五歳以下の小兒に起り、麻疹、猩紅熱、頭部の濕疹などに引續いて起つて來ることがある、また何等認むべき原因無くして急に起ることもある。

通常は多少の發熱を以て起り、誤嚥（乳にむせ又乳を吐く）呼吸困難を起し遂に

は窒息せんとする位に甚しくなり、其呼吸は喘鳴を呈して來る、全でいびきをかいて居る樣に聞える、併し聲は少しも嗄れては居ない。

此病氣は、初め徐々に困難が起つて來るが、通常四五日から一週間位の經過の中に急に呼吸困難がひどくなるものであるから、若し扁桃腺肥大、扁桃腺周圍膿瘍などが無くて、そして比較的短い時日の間に呼吸困難を起し、然かも聲に異常が無い場合には此病氣に注意することが必要であつて、若し疑はしき場合には專門醫に就て診査を受け適當の所置を受くることが必要である。躊躇して居るときには其小兒は窒息死を來たすやうな危險を生ずることもあり、或はまた膿汁が喉頭の內に入り肺炎を起す危險のあるものである。

第七　咽頭實扶垤里亞

實扶垤里亞は、急性傳染性の病氣であつて、特殊の黴菌によつて起るものであるが、實扶垤里亞には重症もあれば又輕症もある、併し乍ら假令輕症であつても決して油斷がならぬ、實扶垤里亞の黴菌から生ずる毒はなか〳〵猛烈であつて、其爲めに心臟が弱つたり、または腎臟が犯されたり、其神經の麻痺が起つたり、種々な恐るべき症狀が繼發するものである。

通常扁桃腺或は其附近に黃白色の斑點が見える、それが漸次に擴がつて遂には扁桃腺全部を被ふ樣になる尙ほ喉頭の方にも進み喉頭實扶垤里亞となり一種特別な犬の吠へる樣な咳嗽を發するに至る尙ほ甚だしきときは呼吸困難を起して、かまはずに置けば遂には窒息死を來し、又は心臟麻痺を起して死ぬ、故に實扶垤里亞の疑ひがあるときは成るべく早く醫師に治療を求むることが必要である。

此頃は實扶垤里亞は時期さへ早ければ注射によつて比較的容易に癒ることが多いからして、早く醫者に診せ、そして注射を受くることが必要である。また呼吸困難を起した場合には、夜中でも醫師の處に駈けつけてそして氣管切開を受けて呼吸に差支へ無い樣にすることが必要である。

實扶埃里亞は大人には來ない病氣の樣に思つて居る人があるが、矢張大人にも來るものである、然し子供は大人に比して比較的犯され易いものである。

第八　咽頭結核

結核は肺ばかりで無く、鼻腔内、口腔内または咽頭にも喉頭にも來るものであつて咽頭に來た場合には通常結核性潰瘍となつて來る、卽ち其部分の粘膜は潰れて同時に痛んで來るものである、多くは肺結核に併發して來るもので食物を攝る時嚥下する時等に非常の疼痛を感じ爲めに睡眠も妨げらるゝに至る、從て身體の衰弱が急にはげしくなる。

此病氣は、時期が早くて、且つ其人の營養が比較的良好であつた場合には、適當の治療法によつて癒ることもあるが、通常は全く治癒する事は困難である然し疼痛をのぞく事は出來る。

結核は傳染性の強き病氣である故、食器等は區別し又消毒を嚴にせねばならぬ

第九　咽頭黴毒

黴毒に罹ると、咽頭に特異の黴毒の症狀を顯して來る、遂には其部分に潰瘍を作つて其部分が潰れる。斯くの如き黴毒性潰瘍は、唯其局所に藥液を塗つたり、または含嗽をした丈では決して癒るものではないからして先づ全身にある毒を消すことが必要である。それには種々の方法がある、假へば「サルヴアルサン」を注射する方法、塗擦法或は其他の藥液を注射して、治療する方法等あるが其等は總て信賴すべき醫師に一任し嚴重なる黴毒の治療を受け充分病氣を治さないと子孫に迄病毒を遺す懼がある、咽頭の症狀は斯くして段々癒るものである。

第十　咽頭の異物

食事中義齒又は魚骨が咽頭の異物となる事は中々多い、其他小兒の遊戯中玩具を呑み咽頭に閊へる事がある其内でも魚骨が咽頭に刺るのは日常屢經驗する、魚骨が刺ると嚥下の時に劇しい痛みを感ずる、長時日刺つて居ると疼痛に苦しむの

みならず其部分が化膿する様になる。魚骨の刺さるのは扁桃腺か又は其近處が多くまたは深部に入りては食道の入口部などに刺さることもある。かう云ふ場合に多くの人は其魚骨を除かんとして無理に食物の塊を嚥み込だり、或は指頭で觸つたりする、其爲めに反つて魚骨が組織内に深く刺さつて見出すことが出來なくなり、遂にはそれが原因となつて膿瘍を起し外部から切開を要する様な恐るべき結果を起すことがある、故に若し異物が刺さつた場合には早く醫師に就て取り去つて貰ふことが必要である。咽頭内の魚骨は中々見出し難いものである、殊に小兒に於ては尙困難を感ずるものであるからして二三歳の小兒に魚肉を與へる際には一々魚骨の存否を嚴重に檢査して與へる事が必要である。魚骨以外の異物も第一に醫の力を藉りて摘出する事が必要である。

第十一　食道の異物

小兒が遊戯中貨幣または玩具を誤つて嚥み込み食道に閊へることがある其他大人では食事の際、又は熟睡中小楊子又は工合の悪い義齒を呑み込みそれが食道に閊へることもある。

若し異物が食道に閊へたならば、直ちに經驗ある專門醫の處に行き食道鏡と云ふ器械によつて取り出して貰ふことが必要である。食道異物を長時日放置しておくと時として食道壁が破壞して遂に救ふ可らざるに至る。又法に叶はざる無暴な方法で異物除去を試みるとその爲めに食道を破る事もある。近來は食道鏡と云ふ便利な器械が出來た、此器械を以て取れば比較的簡單に摘出する事が出來る。

第六章　喉頭の疾患

第一　急性喉頭加答兒

急性喉頭加答兒は急性咽頭加答兒に併發する事もあるし又單獨に起る事もある塵埃の多い乾燥した空氣中に居るとか、または聲音を濫用したり、其他喫煙飲酒

の嗜好過度等によつて起るものである、故に併優などは此病氣にかゝり易い。

此病氣にかゝると第一に音聲が嗄れ喉頭内が乾き又瘙痒感を訴へ、咳嗽が出る症狀劇しき時は刺す樣な痛み傷のある如き感じを起すこともある。小兒は喉頭内が腫れる爲めに呼吸困難を起す事もある。かう云ふ場合には應急處置として先づ刺戟性の飲食物を廢め、冷たい流動食を攝り、頸部の周圍に五十倍硼酸水の濕布をなし、或は氷嚢で冷し、五十倍の鹽酸水又は重曹水で吸入するがよろしい、咳嗽の多く出る時は醫師より藥を貰ふがよい。

第二　慢性喉頭加答兒

これは急性の喉頭加答兒に罹つた際に、適當の處置を施さなつかた場合、または、鼻腔、鼻咽腔、咽頭に疾患ある爲め等に起るものである。故に慢性鼻炎又は蓄膿症扁桃腺炎等があると起る、其他氣管肺臓に病氣があつても起るものである。又刺戟性の瓦斯、埃の多き空氣、乾燥の過ぎた空氣も原因となる。其外過度に音聲を用

ふる時に起る此病氣にかゝると矢張音聲が嗄れ、若しくは音聲が早く疲れ、喉頭内は乾燥し、或は刺戟感異物感等を訴へるものである。

かう云ふ場合には早く專門醫の治療を受くることが必要であつて、決して自分では喉頭の内部に藥液を塗附することは出來ないものである。

第三　喉頭實扶埜里亞

實扶埜里亞は屢々喉頭に來る病氣であつて、此病氣にかゝると音聲が嗄れ一種特異の犬の吼へる樣な咳嗽をなし又呼吸困難を起して來る、時として急に呼吸困難が劇しくなり急いで氣管切開をしなければ窒息してしまふ樣のこともある、故に實扶埜里亞の疑があつたなら一刻も早く專門醫の診を乞ひ血清の注射を施して貰ふがよい。

第四　喉頭結核

喉頭結核は、多くは肺結核があつて、それに續發して起る、卽ち肺から出た痰

原因

が喉頭の粘膜に附着して、それが誘因となつて起るものである。然し直接に結核菌を含んだ空氣を吸ひ込んで起る事もある。最も危險なのは喉頭結核患者を看護し又は接近して談話すると患者の結核菌を含んだ痰が飛沫となつて喉頭内に入りそのために傳染する事もある、又食器から傳染する事もある。

症候

最初は唯音聲が嗄れたり、音聲が早く疲れる位の症狀であるが、遂にはだん〳〵音聲が出なくなり、全く失聲するに至り、同時に嚥下痛が起り飲食物を攝ることが困難になり、其爲めに營養が悪くなつて患者は急に衰弱するものである。

喉頭結核も早い時期に專門醫の適當なる治療を受くれば苦痛も輕くなり、また其經過も長くならぬものである。若し自宅に喉頭結核の患者が居る場合には、其食器を別にして消毒するは勿論、其患者の喀痰等は充分消毒して健康者に傳染せぬ樣計ることが必要である。又喉頭結核患者は決して聲の出ぬのを無理に音聲を出したり談話を試みてはいけない、なるべく喉頭を安靜にする樣に心がければならぬ故に沈默して居るがよい、そして用事は筆談を以て命するがよい、學業は暫く中止する方が宜しい。

治療上の注意

餘り患者の疼痛の劇しい場合には、神經に注射をして、其痛みを輕くする法もあり、また手術的に神經を切斷して疼痛を除く法もある。

* * * * * * * *

其他喉頭には、黴毒性の病氣も起り、また悪性の腫瘍假令ば癌腫の如きものも出來ることがある。是等は初めは矢張り聲が嗄れる丈けであるが漸々に呼吸が困難になり痛みを感ずる樣になり遂には全く聲が出なくなり食物も通らなくなる事もある、故に聲が嗄れたら速かに專門醫の診斷を請ひ悪性のものがあつても時期が早ければ治療の道はあるから決して痛みがなくとも放任して置かぬ樣にするが宜しい。

若し義齒玩具食片等の異物が氣管内に入つた場合には氣管切開により又は氣管鏡を挿入して取り出すことが出來るものであるによつて、成るべく早く此處置を受くることが必要である。若し長い間異物が氣管の中に留つて居ると、其爲めに異物性肺炎を起し救ふべからざる事に立ち至るものであるからして、一刻も早く其處置をしなければならぬものである。

附錄

耳鼻咽喉科專門醫に來診を請ひたる時の注意

耳鼻咽喉の診察治療は内科醫の診察と異なり種々の器械を用ひねばならぬ、從て專門醫を招いた時には二三特種の注意が必要である。

第一に注意すべき事は光線であつて、耳鼻咽喉共皆深い場所にある故反射さして覗かなければ充分に見る事が出來ぬ、從て診察には是非共光線が必要である、其光線もなるべく強い光の方がよい、光が弱いと充分の診察が出來ず、從て病氣の分らぬ事もある。之は患者に取りても甚だ不利益であるから能く病氣を診て貰はうと思ふならばなるべく明るい光を用意して置くがよい、卽ち晝間ならば日當りの能き室又は明るい窓のある室に患者を置くがよい、夜間ならば電燈又は瓦斯のある室に病人を置く樣にする、尤も電燈や瓦斯が高い天井に在つて動かぬ樣な時は其光を使つて診察する譯に行かぬ場合もあるから光はなるべく病人の枕下の近くにあるのがよい。

第二に注意すべき事は使つた器械を載せる盆か又は新聞紙の如きものを傍に置く事で、一度用ゐた器械を疊又は卓子の上に置くと其處を汚損する、時としては傳染の危險もあるから此點は勉めて實行して貰ひたい。

第三には熱湯若くは酒精の用意である、これは一度使つた器械を清潔にし又消毒するに用ゐるのであつて、耳鼻咽喉科醫にはどちらかと云ふと手洗ひよりも此方が入用である。

其他咽喉の治療の際には痰壺などの用意も必要である。

家庭醫學叢書 第三編 耳鼻咽喉病の話 終

大正四年九月七日印刷
大正四年九月十日發行

正價金拾五錢

編纂者 伊藤尚賢
發行者 東京市京橋區出雲町一番地 野村鈴助
印刷者 東京市麹町區有樂町二丁目一番地 中村政雄
印刷所 東京市麹町區有樂町二丁目一番地 報文社

發行元 東京銀座大通新橋際 新橋堂書店
電話新橋一九九一番
振替東京 二〇〇番

60
511

終